

教養ブックレット Vol.1

人生を決めた書物



岐阜大学 教養教育推進センター編

人生を決めた書物

はじめに

■日本文学

横光利一『旅愁』を読んだころ

中島敦『李陵』

三島由紀夫『金閣寺』との出会い

灰谷健次郎『兔の眼』

三浦綾子『氷点』

司馬遼太郎『坂の上の雲』

渡辺淳一『花埋み』

橋本治『窠変源氏物語』を読んで

興津要編『古典落語』

■海外文学

シェイクスピア『十二夜』

バスカル『パンセ』

ドストエフスキー『罪と罰』

ニーチェの『ツアラトウストラ』を巡る思い出

■中国古典

『詩経』

孔子『論語』

松浦友久『中国詩選三唐詩』

■人文学

岡倉天心『茶の本』とワールド

内村鑑三『家庭・人生・青年(学生)・教育・・・』とのかかわり

吉野源三郎『君たちはどう生きるか』

神谷恵美子『生きがいについて』

フロイト『精神分析入門』

河合隼雄『ユング心理学入門』

上野英信『地の底の笑い話』

.....

早川万年 [教育学部]

天谷孝夫 [応用生物科学部]

梶田和男 [医学部]

今井亜湖 [教育学部]

沓水祥一 [工学部]

勝田俊輔 [教育学部]

山本真由美 [保健管理センター]

川島光夫 [応用生物科学部]

内田 勝 [地域科学部]

矢橋 透 [教育学部]

本城勇介 [工学部]

桑田一夫 [人獣感染防御研究センター]

小澤克彦 [教養教育推進センター]

安東俊六 [教育学部]

森田晃一 [留学生センター]

松尾幸忠 [地域科学部]

野元世紀 [教育学部]

湯川敏信 [教育学部]

益川浩一 [総合情報メディアセンター]

鎌部 浩 [工学部]

深尾 琢 [医学部]

鈴木 壮 [教育学部]

杉原利治 [教育学部]

1

3

5

7

9

11

13

15

17

19

21

23

25

27

29

31

33

35

37

39

41

43

45

47

■社会科学

- 井沢元彦『逆説の日本史』
 デュシャン『デュシャンの世界』
 マルクス『資本論』
 レヴィン『レーニン最後の闘争』
 宮本憲一『社会資本論』
 宇井純『公害原論』
 『石流れ木の葉沈む日々』
 ラミス『世界がもし100人の村だったら』

■自然科学

- ダーウイン『種の起源』
 ブラックマン『ダーウインに消された男』
 ファーブル『昆虫記』
 ローレンツ『ソロモンの指輪』
 ワトソン『二重らせん』
 川喜多愛郎『生物と無生物の間』
 和秀雄『ニホンザル性の生理』
 グールド『ワンダフルライフ』
 ホーキング『ホーキング、宇宙を語る』
 カーン『沈黙の春』を読んだころ
 シュレディンガー『生命とは何か』
 ケンドラー『生命の糸』
 ペンス『医療倫理』
 奥村康『免疫のはなし』
 中谷宇吉郎『雪』
 板倉聖宣『ピタゴラスから電子計算機まで』
 ライ、サウオールド『まだ科学が解けない疑問』
 高橋裕『地球の水が危ない』

愛木豊彦	【教育学部】	51
野村幸弘	【教育学部】	53
稲生 勝	【地域科学部】	55
竹森正孝	【地域科学部】	57
竹内伝史	【地域科学部】	59
富樫幸一	【地域科学部】	61
近藤 真	【地域科学部】	63
今井篤志	【医学部】	65
土田浩治	【応用生物科学部】	67
小見山章	【応用生物科学部】	69
二上英樹	【生命科学総合研究支援センター】	71
森脇久隆	【医学部】	73
松永洋介	【教育学部】	75
福士秀人	【応用生物科学部】	77
鈴木正嗣	【応用生物科学部】	79
國貞隆弘	【医学部】	81
須藤広志	【工学部】	83
高見澤一裕	【応用生物科学部】	85
吉田 敏	【工学部】	87
丸山清史	【工学部】	89
谷口泰弘	【医学部】	91
本橋 力	【医学部】	93
山本典史	【人獣感染防御研究センター】	95
室 政和	【工学部】	97
甲畑俊郎	【医学部】	99
高木朗義	【工学部・社会資本アセットマネジメント技術研究センター】	101

はじめに

人生にはさまざまな出会いがある。出会いは、偶然であつたり、必然だつたりする。幸福な出会いもあれば、不幸な出会いもある。人に出会う、植物や動物や虫に出会う。ある出来事や事件に出会う。美術や音楽や演劇や映画に出会う。それらさまざまな出会いによつて、人生がほんの少しだけ、あるいは劇的に変わることがある。

ある書物との出会い―たつた一冊の書物と出会うことだけでさえ、そんな変化の生じることがある。ファーブルは『昆虫記』のなかで、「ある本を読んだ時、目の前にぱつと精神の地平線が開けたような気がするところがある」と書いている。その地平線のかなたに人生の方向が見えることもある。

ここに集められた50の文章には、それぞれの研究者の書物との出会い、かわりが記されている。それがたし

かに現在の職業、仕事、研究に、直接、あるいは間接的につながっていることがうかがえる。そのひとつひとつに、こう言つてよければ、人生のドラマを感じるのだ。

だから、このブックレットは、書物の内容を要約して、その意義を伝え、人に読むように薦める読書案内というよりも、むしろ書物との出会いを軸にした人生のショート・ストーリー集といったおもむきがある。ここで私たちは、50の人生を、少なくとも50冊の書物とともに追体験することができる。それが可能であるのも、私たちがまさにこのブックレットと出会ったからなのである。このように書物を媒介ばいはいしながら、私たちはさまざまな人生と、さらにまた別の書物へと出会いを広げ、そのつど新たな地平線の向こうに立ち現れる未知の風景を見ることになるのである。

横光利一『旅愁』を読んだころ

早川 万年〔教育学部〕

人生を決めた、というといかにも大げさで、それほどものではないような気もするが、今思えば本書はわたくしの進路にすくなくならぬ影響を与えたと言えそうである。

近頃の大学生にしてみれば、近代日本文学を専攻するか、かなりの読書好きでもなければ、横光利一を読むこととはないのかもしれない。その名を知らない文系学生もいるであろう。はたして一般書店の店頭に本書は見られるのであろうか。

今、わたくしの手元にある『旅愁』上巻（新潮文庫版）は昭和46年版である。どこで買ったのか、いつ買ったのかも記憶にないが、おそらくわたしが高校2年生か3年



講談社文芸文庫

上巻 1680円（税込）

下巻 1785円（税込）

生になったばかりの頃で、ようやく真剣に進路を考えはじめた時期に購入したのではなかったか。どんな理由でこの本を手にとったのかもおぼえていないけれども、当時、通学コースが同じであった友人とこの本を話題にした記憶がある（その友人は理系であったがとくに読んでいた）。その友人に教えてもらったのか、あるいはまたま書店で手に取り買ったのかもわからない。上下二冊と長編で、しかも内容は壮大である。新潮文庫版のカバーの紹介には、「歴史学の実習かたがた近代文学の様相を視察のため渡欧した矢代は、船中で西欧心酔者の久慈、カトリック信者の千鶴子らと知り合う。先進ヨーロッパの風物を眼にして、彼らの胸に去来したものは、日本

そのものがもつ夢と不安であった」とある。

横光利一が本書を執筆した時期は昭和10年代の戦時である。ナシヨナリズムへの傾斜は著者自身もそうであったようで、とくに後半部分には少々不可解な「伝統」議論も見られる。算克彦あたりの影響でもあったのであるうか。とはいえ、外来文化の受容をいかに理解するかは、近代日本を語る上に避けられない問題であって、それは『旅愁』の主人公、矢代耕一郎が取り組む「日本歴史」の本質的な問題でもある。わたくしが当時、なるほどと思ったのは、ヨーロッパから戻った主人公が、落ち着いて研究に取り組んだ際、遣唐使に関心を向けたとする箇所である。考えてみれば、飛鳥時代の遣唐使以来、先進国家中国に赴き、苦難を経つつも、学び帰国した遣唐留学生たちの姿は、明治以後の日本の若き海外留学生たちの原風景でもあった。彼らがいったい何を考え何を学び、何を持ち帰ったのか、そしてそれは「日本」にいかなる

「成果」をもたらしたのか。「日本そのものがもつ夢と不安」、歴史学とは本来、このような問題意識と不可分のはずである。ちなみに、横光の執筆は、敗戦という厳しい現実を前にして立ち往生する。著者は、語るこの方向性を見失ったのであるう。本書には結末といえるほどの展開は見られない。「歴史」すなわち近代日本なるものの頓挫は文芸にも波及したのである。

結局、わたくしは大学において日本文化（比較文化）・日本史を専攻することになった。『旅愁』を読み返すことはなかった。けれども、大学入学後に和辻哲郎の『風土』、宮崎市定『アジア史概説』、足立巻一『やちまた』といった書物に出会い、比較的近年では青木保『文化の否定性』、『日本文化論の変容』にいたるわたくしのささやかな読書の出発点にはやはりこの『旅愁』があったように思う。

横光利一（二八九八一—一九四七）小説家。福島で生まれ、少年期を三重で過ごす。新感覺派として、川端康成とともに活躍。一九三六年にヨーロッパを旅行。『旅愁』は、

敗戦後の一九四六年に完結。そのほかの作品に『上海』(岩波文庫)、『機械』(新潮文庫)、『欧州紀行』(講談社文芸文庫)などがある。

中島敦 『李陵』

新潮文庫

380円（税込）

天谷 孝夫 【応用生物科学部】

私と「李陵」との出会い、今から46年も前の、高校

2年生の初夏の頃と記憶している。ロマンチックな人柄であった国語のN先生は、何と副読本に中島敦の「李陵」を取り上げ、楽しそうに学生に読ませたのだが、私にとつてその衝撃は計り知れないものとなった。内容は、漢の武帝の天漢2（前99）年、秋9月に、居延塞（現在の内国内蒙古自治区エチナ旗付近）を歩兵のみ五〇〇〇名を引き連れ、北方のアルタイ山脈の東南端がゴビ砂漠へ没する辺境に、匈奴の姿を求め出撃した李陵と、捕虜となった李陵を弁護したがために宮刑に処せられた「史記」の作者司馬遷、それに漢の平和の使節として匈奴を訪れ長期間囚われの身となった蘇武との、三者三様の苦難と

運命とを描いたものである。

だが、なぜ古代の東洋史から題材を得たこの様な物語にのめり込んだのかという点と、どうやらその前の読書体験に根ざしたのだろうと思っている。自分で言うのもないが、私は読書少年であった。日本人のほとんどが未だ貧しい時代であったから、新本を購入することなどは夢のまた夢、そこで地域の公立図書館にせつせと通った。何と中学1年生の夏休みには、毎日、中国の歴史を略述した「十八史略」を借り出し読みふけたものであった。もちろん、深い解釈が出来るはずもなかったが、とにかく、圧倒的に優勢な農耕民族に対して、極めて少人数の騎馬民族が敢然として戦いを挑み、かつ高い誇りを持つ



て堂々と対等に振舞う姿に、強烈なイメージを抱いたことは確かであった。

そして、「李陵」の著者・中島敦は、それ以来ずっと私の最も尊敬する作家となっている。皆さんの中には、苦悩のあげくに虎になった男を描いた「山月記」をご存じの方がおられるかもしれない。彼は、昭和17年に僅か33歳で死亡したため残された作品は少ないのだが、何れも高い評価を得ている。特に「李陵」は彼の地で中国語訳され出版されたほどの作品であり、私が深い感銘を受けたのも当然と言えよう。爾来、小説の舞台である現在

のモンゴル地域に対して、私の限らないあこがれが強固に根付き、今に至っているのである。

大学は、歴史学ではなく農学を専攻した私であったが、モンゴル全般にわたる関心は色あせることなく、今も青春の真つ直中にある。文理融合型の日本モンゴル学会副会長として、時には専門の立場からモンゴルに関わる研究成果を発表しながら、また、分からぬままに専門以外の研究成果に触れる喜びを感じつつ、「李陵」との出会いに思いを新たにしているところである。

中島敦（一九〇九―一九四二） 短編小説の名手。東京

大学国文科卒業後、私立横浜高等女学校の国語と英語の教師になるが、一九四一年、ミクロネシア諸島パラオに

ある南洋庁へ書記として赴任する。気管支喘息のため早

逝。他の作品に、「山月記」「名人伝」「弟子」などがある。いずれも、現在、新潮文庫で読める。

三島由紀夫『金閣寺』との出会い

梶田 和男〔医学部〕

「昨日のをみたか？」

校門に入るなり、後ろから駆けてきた同級生に声をかけられた。県立高校に通い始めて4ヶ月目の、よく晴れた朝だった。校庭では野球部が声を張りあげていた。意味はすぐに解った。多分同年の多くがそうであっただろう。前の夜、大阪万博の会場で歌うメリーホプキンスの姿をテレビで見っていた時、突如ビートルズが現われ、レットイットビーの演奏風景が映ったのだ。それは当時の私等にとって殆ど崇拜の対象であり、共通言語でもあった人物が、動いているのを初めて見た時だった。その驚きはそれから夏休みが始まるまで、校内のあちらこちらで語られたものだった。秋の初めには学園祭に合わ



新潮文庫

552円(税別)

せて、そこかしこでフォークギターを囲んで歌う集団があり、また校庭の一面では鳥の巣のような頭を振り回した同級生が、大音量で毒々しいビブラートを響かせていた。そして11月、小春日和の午後、三島事件の一報が教室に飛び込んで来た。衝撃的ではあったが、安田講堂やよど号事件の記憶が生々しく残り、力と不安が横溢した空気が小都市の進学校にまで及んでいた当時、校庭に射し込む、余りにも穏やかな光を眺めながら、アジテーションの虚しさを想うのが第一印象だった。その後には公表された、総監室の床に立てられた生首の写真を見ても、そこに漂う静謐が私には支配的と思われた。

今回「金閣寺」の体験を執筆させていただく機会を得

たため、当時の記憶を遡^{さかのぼ}ってみるのだが、この割腹事件、その数日後の小説との出会い、そして彼の作品全体への傾倒は、思い返せば、全てが色恋沙汰に似た、一つの事件だった。あの時私はただ小説に無数に鏤^{ちりば}められた言葉に酔っていた。

―「人に理解されないということが唯一の矜^{せい}りになっていった」「私の心の暗黒が、無数の灯を包む夜の暗黒と等しくなりますように」「仏に逢うては仏を殺し、祖に逢うては祖を殺し」「それにしても悪は可能だろうか。―」ベトナム戦争を尻目に、GNP第2位に浮かれる浅薄な世相等に対する人並みな反発と共に、それを糾弾^{きうたん}する者達の、「皆で良い人になりましょう」という押し付けにも辟易^{へきえき}していた私にとって、小説の言葉は慈雨^{じう}の様に染入って来た。それは思想というものではなく、ただ取り留めなく、暗黒、悪、快楽、墮落、死、これらに彩^{いろど}られた淫靡^{いんび}な世界を夢想していた。酔った拳句^{あけく}に更に強い酒

三島由紀夫（一九二五―一九七〇） 世界的に著名な小説家、劇作家、評論家。大蔵省勤務のあと、作家に転身。執筆以外にも、映画出演、写真集の出版、政治的発言な

を求め、ポオ、ポオドレエル、マラルメ、ドストエフスキイ、ワグナーと渡り歩いた。後で気が付けば、西欧の作家の声が常に肉声であるのに対し、三島の声は仮面の奥でくぐもっていた。神への愛は時には甘えであり、怒りは時に嫉妬であり、反逆は時に自傷であり、神と父は殆ど同義であった。しかるに神を持たぬ我が国では「絶対」の象徴として金閣寺を担ぎ出す他なかったか。あるいは金閣寺すら絡め取ってしまった戦後の俗悪に戦いを挑んだか―しかしそれは喜劇以外の何ものでもなかった。

年取った今となり、これらの作家達を愛した美神に私は愛されておらぬと確信するに至った。残された楽しみは、いつか樹々に囲まれた夏の山小屋で、全てを忘れた上でもう一度指輪を聴き通し、古文書を読むようにゴシックロマンに耽^{かか}りたいという願いを夢見る事である。

ど、活発な活動を行う。一九七〇年、東京市ヶ谷の自衛隊で割腹自殺する。代表作に、『仮面の告白』『潮騒』『豊饒の海』などがあり、すべて新潮文庫で読める。

灰谷健次郎 『兎の眼』

角川文庫

600円(税込)

今井 亜湖【教育学部】



「兎の眼」との出会いは小学校3年生だったように記憶している。

国語か書写の授業で担任の先生が紹介してくれた一編の詩「せんせいけらいになれ」。

こんな面白い詩を書いたのが自分と同じ小学生であったことへの驚きと悔しさ。この悔しさのおかげで、その後、後に関先生の話を食べるように聞くことになる。当時の私にとってヒトをゲラゲラ笑わせることができる人は羨望せんぼうの的であった。それをいとも簡単に成し遂げた一編の詩の作者に対抗意識を抱いたのではないか、と今の私は分析する。

他にも面白い詩が「せんせいけらいになれ」という本

には収録されている。その本を編集した灰谷健次郎さんはいくつも長編小説を書いていた。「小説は細かい字で書かれているから、3年生のみんなが読むのは大変だけど、どれもとても感動する話だよ」と先生は話し、いくつかの本を見せてくれた。その一つに「兎の眼」があった。すぐに親にねだって買ってもらった灰谷健次郎さんの本は、詩集「お星さんが一つでた　とうちゃんがかえってくるで」と「兎の眼」。「せんせいけらいになれ」を買わなかったところに当時の自分のプライドを感じる。大きな字で書かれた詩集の方はすぐに読んでしまったが、「兎の眼」は家の学習机の上に置かれたまま。読み始めるのはそれからしばらく後のことになる。

兔の眼は、塵芥^{じんがい}処理所に併設されている長屋で暮らしているハエに詳しい小学1年の鉄三と、大学を出たばかりで新婚の小谷先生を中心に展開される、これまで読んでいたおとぎ話とはかけ離れた現実感たつぷりのお話だった。問題児のレットルを貼られてしまった鉄三への教師たちの対応、職業によって差別されるヒトの存在、塵芥処理所を抱える地域の事情と様々なヒトの思惑など、これまで読んできた本では絶対に出会うことのない話が内容と、加えて文字の大きさに、最初はどこどいながら1ページを読むのに何時間も何日もかかった。最初の数十ページを読むのは苦行に等しかったが、話が佳境に入る頃には休み時間や放課後になるのを待ちわび、読み始めると一気に本の世界に吸い込まれていったことを今でも覚えていいる。

予想外の鉄三の行動を理解しようと奮闘する小谷先生の姿、鉄三を含めた長屋に暮らす子どもたちへの教師た

ちの愛情、それに呼応するかのようにな変わっていく長屋で暮らす子どもたちの態度。「喜^い一憂^いし、涙が自然にこぼれ落ちることもあった。「真剣にそのヒトのことを思えば、必ずその気持ちは相手に伝わるんだ」というメッセージを、この本は当時の私に残した。

「兔の眼」との出会いによって、小学生だった私は本の面白さを遅ればせながら知り、友だちとの憩^いいの場ではなかつた小学校の図書館が、様々な世界を体験させてくれる特別な場所へと変わった。そして、「教育」という営みの素晴らしさと可能性を最初に教えてくれたのも「兔の眼」だったのでないかと思う。

今、私は「教育」について考える日々を送っている。我が国の教育は多くの課題を抱えているが、それでも私は今の「教育」に惹かれ、教育は素敵な営みだとやはり信じている。「兔の眼」を読み終えた後に生まれたモノはまだ私の中で生きていられるかもしれない。

灰谷健次郎（一九三四—二〇〇六）一九七一年、三七歳のときに、17年間勤めた小学校の教員を辞め、作家活動を始める。一九七四年に出版された『兔の眼』は、彼の

デビュー作。他の作品に、『太陽の子』（角川文庫 第1回路傍の石文学賞受賞）などがある。

三浦綾子 『氷点』 (上・下)

角川文庫

各483円(税込)

沓水祥一〔工学部〕



私の三浦綾子著「氷点」との出会いは、大学の3年のときである。経緯は忘れたが、友人から教えてもらって、本書の存在を知った。文庫本で本編が上下二冊、続編がやはり二冊を、別々にはあるが、ほとんど一晩のうちに一気に読んでしまった記憶がある。

本書は、キリスト教徒の著者の生きることの「原罪」をテーマに書かれている。当時は、今よりいろいろなことと興味を持っていたから、キリスト教にもある程度関心があつて、その関係の本もいくつか読んでいたように思うが、私はキリスト教徒ではない。キリスト教観が随

所に出ては来るが、私は、本書は「生きること」がテーマであつて、キリスト教とは無関係に読んで良い小説だと思つてゐる。

本編は、最後に主人公の陽子が自身の生い立ちを知つて自殺を図り、命を取り留めるところで終わっており、続編が、その後、陽子が生きることの罪深さだけでなく、ひとは許し合つて生きるべきであることを知る過程が描かれていたように思うが、複雑な人間関係があつて、その後読み返したわけでもないの、今はもう細かいストーリーは殆ど記憶にない。

唯一記憶にあるのは、生きることの意味を自問して生きる陽子が、養父の父から「一人の人間を、いい加減に育てることほど、はた迷惑な話はないんだね」との言葉を聞くシーンである。

この言葉は、現在、多くの意味を持って私の心に残っている。いまでは直接的に、一児の親である私にとって、子供を育てることの難しさと責任を痛感させられる言葉となつてはいるが、そんなことは、当時学生であつた私が思うはずもない。強く心に残つた理由は、誰でもそうであろうが、将来を模索していた年代の私にとって、ときに自分を悲観した私にとつて、自分一人の人生とつて、いい加減に生きていると周りが迷惑する。精一杯生きなければならぬと、感じたことに他ならない。生きることの罪深さを知るとは、生きることを止めるので

はなく、精一杯生きている他者を認め、許しつつ生きることを知るために重要であることを。

なお、これは、私のあくまでも主観であり、本書の主題の正確な解説ではない。このような文を書くことが、本書を誤つて伝えることになりはしないかと恐れるが、小説はいかように読んでも許されるとものと私は思っている。高校時代まで全くといつて本を読まなかつた私が、大学に入って本を読むことに目覚めた理由は、「生きること」への問いを探し始めたためであり、専門書を除けば、印象に残る本は大なり小なり、その問いに対するヒントを知るからである。その意味で、本書「氷点」は随分と印象に残っている。なにしろ、そのあと一度も読み返していないのに、覚えているのだから。

三浦綾子（一九二二—一九九九）結核の闘病中にクリス

チャンとなる。一九六四年、42歳のときに「氷点」が朝日新聞の懸賞小説に入選。新聞に連載され、二年後に映

画化。さまざまな病気に苦しみながらも、作家活動を続ける。他の作品に『塩狩峠』などがある。出身地の北海道、旭川市に「三浦綾子記念文学館」がある。

司馬遼太郎 『坂の上の雲』

勝田 俊輔【教育学部】

最初に『坂の上の雲』を読んだのは、小学校高学年の時でした。きっかけはよく覚えていませんが、家の本棚に並んでいたのを何気なく手にしたのでだろうと思います。単行本で6冊（文庫本で8冊）にもなる長い本なのですが、出だしの一文「まことに小さな国が、開化期をむかえようとしている」で引き込まれて、その後は夢中になって読み続けたことを覚えています。この本は大人向けに書かれた本ですが、小学生でも理解できました（もちろん、読後感は大人と子供では違います）。

『坂の上の雲』は、日露戦争をテーマとした本です。

一九六八―七三年に新聞で連載され、ベストセラーとなりました。その後も、40年近く前の本にもかかわらず今



文春文庫 全8巻

各670円（税込）

にいたるまで読み継がれており、販売部数は累計一千万部を軽く超えます。それだけに影響力も大きく、また論争を引き起こしてきた本でもあります。

実は、プロの歴史家となった今の自分から見ると、『坂の上の雲』にはいくつかの欠点があります。この本の記述からは、日本が日露戦争に勝てたのは天才が何人かいたためだ、との印象を受けてしまいます。そして何より、日露戦争を肯定的に描きすぎています。ロシアからの圧迫に対抗して日本が立ち上がらなければならなかったという側面はあったにせよ、この戦争はアジアに対する侵略戦争であった（ロシアも日本も帝国主義国家だったのです）ということが、あまりはつきりとは書かれていな

いのです。

自分が歴史家になるきっかけがこの本だった、とは言えません。ただ、本というものは面白いものであり、歴史も面白いものであることをこの本から知った、とは言えるでしょう。その意味で、間接的には自分の人生を決めた書物と言うことになりませう。

いずれにせよ、この本は学術書ではなく、歴史小説として読むべきものです。解釈の偏りには目をつぶりましょう。この本の面白さの第一は、登場人物が実に魅力的に書かれていることにあります。この本は三人の人物

を主人公としています。正岡子規と、秋山好古・真之の兄弟です。秋山好古は、いまだに自分にとつての理想の人間像です。この三人に加えて、魅力的な個性と能力を持ったさまざまな脇役——軍人、政治家、文学者——も大活躍します。

そして、この本は青春小説でもあります。戦争の話ばかりではありません。青春時代まっただなかにあつて、これから自分の生きる道を探そうとしていた若者たちが明治という時代を生きた、その足跡も描かれています。その意味で、若い人には是非読んでもらいたい本です。

司馬遼太郎（一九二一—一九九六） 大阪生まれ。大阪外

国語学校蒙古科を卒業。新聞記者を経て、小説家に。『竜馬がゆく』、『国盗り物語』などの小説のほか、『街道を

ゆく』、『この国のかたち』など、紀行文やエッセイも多数執筆、独自の歴史観を打ち出す。

渡辺淳一 『花埋み』

集英社文庫

600円（税込）

山本眞由美【保健管理センター】



明治29年生まれの私の祖父は「世の中がどう変わっても、戦争が起こっても、医者の仕事は変わらない。」と人の命を助ける「という目的が変わらないから。」とよく言っていました。祖父は「女は手に職をつけなくてはいけない。お国の役に立つように、教師か医者がいい」という典型的な明治の人でした。日露戦争、第一次、第二次世界大戦と三つの戦争体験を持つ祖父は「戦争で女の人には社会の混乱に巻き込まれ不幸になる事が多い。医者になれば生きる方向を見失わなくて良いだろう。」が持論でした。また、「教師は戦争のたびに言うことを変えなくてはいけなかったが、医者は戦争に勝っても負けても言う事を変えなくてすむから、やっぱり医者がいい」

とも。そのような環境で育ったので、私はあまり悩むことなく医学部に入ったのですが、大学1年生の時に読んだ「花埋み」は、どういうふうに生きるか、どういう医者になるかを考えさせてくれた本です。日本最初の女性医師、荻野吟子の生涯を、医師である渡辺淳一が詳細な調査に基づいて長編小説にしたものです。女性が男性と一緒に教育を受ける事すら許されていなかった時代に、数々の苦難を乗り越えて医学を修め、当時の医術開業試験に合格し、政府公許の女医第一号となった人物です。17歳で嫁いだ先で半年もたたないうちに淋病を夫からうつされ、その治療目的で入院した順天堂医院での診察時の羞恥しゆうちによる苦しみから、「女医者がいれば、私のよう

に羞恥で苦しんでいる多くの女性が救われる」と考え医師を目指したのです。つまり、人のために医業を目指したのであり、人のために自分が医者になればよいと考えたのでした。女性が医師になる道の開けていなかった当時に、その道を切り開くところから挑戦したエネルギーは、自分と同じ思いをしている人を助けたいという思いからだったのです。吟子自身、使用人がいるような経済的には恵まれた家庭に育ち、病気をうつされて実家へ帰った後も勉学を続けることができたという事は、ある意味恵まれた環境にあつたはずです。恵まれて育つたからこそ、他の人々のためには身を処して働くというノーブレスオブリージュの精神の持ち主が吟子であり、これ

が読者の胸をうつところですが。武士道の精神を当たり前のように教育されていた祖父の時代の人たちが、「お国のために」という言葉をしばしば使っていたのは、この「人のために働く」ということであつたと妙に納得したことを覚えています。女性医師としては大先輩である吟子の生き方に、私などどうい及ぶものではありませんが、自分が医師としての職業を選んだ以上、自分の行動規範はどうあるべきかを考えさせてくれた一冊です。そして、今、読み返すと、今日のように女性医師が活躍できるのは吟子のような諸先輩の努力により築かれたものであると深い感謝の念を抱かずにはおられません。

渡辺淳一（一九三三〜）小説家。北海道生まれ。札幌医科大学卒業。他の作品に、『白い宴』（角川文庫）『遠

き落日』（新潮文庫）、『失樂園』（講談社文庫）などがある。

橋本治

『窠変源氏物語』を読んで

川島 光夫 [応用生物科学部]

橋本治の「窠変^{よっへん}源氏物語」全巻発売中という活字が新聞の広告欄に大きく書かれているのが目についた。大学時代に源氏物語の現代訳をつまみ食いをするように7割ぐらいを読んだ記憶がある。この本については日本人なら誰もが知っている程度の知識を持っていたが、それ以上の知識を有していたわけでない。しかし、当時でさえ、なぜ表題が「源氏物語」なのかという素朴な疑問を抱いていた。私は数日後、公立の図書館へ行って新刊の「源氏物語」をリクエスト申込書に書き、申請した。図書館の係員から「リクエストに応えられるかどうかはわかりません」と言われたが、後日連絡があり、インクのおいが漂う本を貸してもらえた。私は家に帰り、ソファに座って本のページを開いた。こんな風にゆつくりと腰を据えて本を読むのはいったい何年ぶりだろう、

と思った。もちろん土日の午後の余った時間に1時間ぐらい本を開くことはある。しかし、それは正確には読書と呼べない。本を読みながら、私はすぐに別のことを考えてしまう。

私は小学校の時代から、中学・高校と図書館の本を漁るように読んでいた。大学時代は食事のお金を削ってまで本を買って読んでいた。しかし、いつの間にか読むものが本から研究論文に変わり、軽い読み物以外の本格的な本から遠ざかっていった。私が最後にきちんとした本を読んだのはいつのことであっただろうか。そしてその時なにを読んだのであろうか。どれだけ考えても、私は本の題名でさえ思い出せない。人生というものはどうしてこんなに様相をがらりと変えてしまうのであろうか。

しかし、この日は「窠変 源氏物語」に意識を集中す



中公文庫 全14巻

1200 ~ 1631円 (税込)

る事が出来た。私はなにも考えずに夢中にページを綴った。この本は全部で14巻あり、全巻を読むのに足かけ3年を要した。

この物語は臣籍に降下した皇子で、「源」の氏を賜り、美男子ゆえに「光る」とあだ名された人と、その子「薫る」とあだ名された人と、それを巡る人々について書かれており、世界最初の長編小説で世界文学の記念碑的作品である。シェークスピア（英国）やセルバンテス（スペイン）よりも五百年程早い。これは日本にあつて世界の人々にない何か特異なことがこの物語を書かせたと考えられる。

作者とみなされている紫式部は官名か通称であり、本名は言挙げされていない。平安期はプロの小説家はいない時代であり、形として中国風の律令国家であり、公文書は全部「漢文」すなわち中国語である。作者はこの時期の最高権力者である藤原道長に高価で貴重品であった紙や硯などの援助を受けて、藤原氏の不倶戴天のライバルである「賜姓源氏」が栄華を欲しいままにし、摂関を超えた地位「准太上天皇」になる物語をカナ文字で書いたのである。しかし、現実には藤原良房・基経以来の藤原摂関政治が最高潮を迎えていた。藤原氏は菅原道真を

讒言によって太宰府へ島流し、安和の変（969年、源高明の太宰府流刑）で賜姓源氏という強敵を沈めた。摂関は完全に藤原氏の独占するところになった。なぜ、物語では藤原氏に打ちのめされた源氏が栄華を勝ち取るのだろうか。これは日本の歴史を貫通している「怨霊信仰」の一種でないかと思われる。大国主命から国を譲ってもらった天照大神とその子孫は大国主のために大神殿（出雲大社）を建て、「黄泉の国」という虚構の世界の支配者なることを認めたことや、菅原道真に対しては彼の死後に高い官位（正一位太政大臣）を贈り、ついで「天神」という称号を与え大神殿（北野天満宮）を建てた。そして、賜姓源氏に対しては虚構の世界で栄華を極め、皇位まで乗っ取るという話になり、彼らの怨念が「怨霊」化しないように鎮魂するためにのように思える。この物語から人間の本質、例えば現代の人々がエルメスのバック、メルセデスの車を好むように当時のブランド品である唐物を好み、千年前も今日も日本人の舶来ブランド品の嗜好はほとんど変わらないことを示している。私はこの物語を読んでみると現代小説を読んでいるのか自分が物語と同時代の読者になったのか分からなくなってしまった。

興津要編 『古典落語』

内田 勝〔地域科学部〕

物心ついたころ、私の家には親戚の誰かのお古らしい、杉浦茂のギャグ漫画『猿飛佐助』（現在はちくま文庫）があった。表紙が取れてポロポロになったその本の中では、丸っこく愛らしい顔をした「さるとび」が、「コロツケ五えんのすけ」や「おもしろかおざえもん」といったとぼけた名を持つ忍者たちを相手に、なんともお気楽で平和な忍術合戦を繰り広げているのだった。毎日のように読み返していたせいで、「大昔のちよんまげを結ったヘンテコな人たちがのんきに語り合う」という光景は、私の心の原風景として刷り込まれてしまった。私にとつて本当の意味で「人生を決めた書物」はおそらくこれなのだろう。



講談社学術文庫

1313
円（税込）

そんな子どもが落語に興味を持つようになったのは、言わば自然の成り行きである。今は内容を大幅に削られて講談社学術文庫に入られている『古典落語』および『古典落語（続）』は、小学生の私がこのシリーズに出会った一九七〇年代前半には、文庫本で全6巻に及ぶ堂々たる古典落語の集大成だった。そば屋の勘定をごまかそうとする男が失敗する「時そば」、知ったかぶりの若旦那が珍味と称して腐った豆腐を食べさせられる「酢豆腐」、生まれた子どもにめでたい名前を付けようと、物知りの和尚に聞いた運のいい名をすべて並べてやたらに長い名前ができあがってしまう「寿限無」、そそっかしい男が、自分の弟分に似た行き倒れの死体を見つけて、大あわて

で弟分本人を連れてきて確認させる「そこつ長屋」……
そうした物語を私はむさぼるように読んだものだ。

「寿限無」の名前を最後まで言える同世代の子どもは、
まわりには私の他にいなかった。「じゅげむじゅげむ
ごこうのすりきれ かいじやりすいぎよの すいぎよ
うまつ うんらいまつ ふうらいまつ くうねるところ
に すむところ……」で始まるあの長い名前を言えたところ
で、そもそも同級生は「寿限無」という落語自体を
知らないのだから、自慢のしようもないのだ。それでも
「寿限無」の名をちゃんとと言えることは、どこか誇
らしかったのを覚えている。

おそらく、どちらかと言えはいじめられっ子で友だち
の少なかつた私には、まわりの人たちには知られていな

くても、どこかよその場所には熱狂的なマニアがたくさ
んいるらしい落語というものを通して、そのどこか遠く
にいる誰か——「大昔のちよんまげを結ったヘンテコな
人たちがのんきに語り合う」光景の楽しさを知っている
誰か——とつながっていることが重要だったのだろう。

『古典落語』シリーズの編者として、一つ一つの落語に
簡潔的を射た解説を付けている、興津要（おきつ・か
なめ）という読みにくい名前の研究者にあこがれた。

私は現在、18世紀（つまり江戸時代）のイギリスの滑
稽文学を研究している。対象が日本からイギリスにずれ
ただけで、小学生の落語趣味をそのまま引きずっている
のだからと改めて気づいた次第である。

興津要（一九二四—一九九九）近世文学、および落語研
究家で、早稲田大学で教鞭をとっていた。現在、『古典落

語』の正・続編と『江戸娯楽誌』が、講談社学術文庫か
ら出ている。

シェイクスピア 『十二夜』

矢橋 透【教育学部】

『十二夜』は、シェイクスピアが一六〇〇年ごろに書いた傑作喜劇である。公爵と侯爵家の後とり娘オリヴィア、そして難船して兄と財産を失ったのち男装して公爵に小姓として仕えているヴァイオラの、すべて片想いからなる三角関係を主筋にし、それにくそまじめな侯爵家の執事をオリヴィアの叔父を中心とする遊び人グループがペテンにかけける脇筋が絡み、結局ヴァイオラの死んだと思われていた双子の兄が登場しオリヴィアの心を捉えることで、感情的な袋小路がいつきに解消し、二組の結婚からなる大団円へと向かう。

私は中学生の頃からシェイクスピアの戯曲とくに喜劇が好きで、そのことが大学で仏文科に入ったとき、古典



光文社古典新訳文庫

495円（税別）

主義喜劇のモリエールを研究対象とするきっかけとなった。したがって、シェイクスピア喜劇は現在に至るまでの私の演劇研究者としての人生を決めたと言っても過言ではないのである。

だが、なぜシェイクスピア喜劇の他愛がないと言える言えなくもない作品世界が、私を捉えたのだらうか？その答えを、私は大学の終わりか大学院の初め頃、当時NHKで放映されていたイギリスBBC製作の「シェイクスピア劇場」の『十二夜』を見て非常に感動を覚えたさに初めて明確に意識した。その感動には、ヴァイオラを演じた女優の可憐さとか、言葉遊びに満ちた詩的な言語世界——それに道化の歌の音楽世界が協和する——も

与つてはいただらうが、一番魅了されたのは、その近代的な世界観とはまったく異なる独特の世界観だった。それは、人間は運命の悪戯とか自らの判断や感覚の過誤に
よりさんざん翻弄され行き迷うのだが、最終的にはある
大きな摂理のような力により、縁もなく階層も違う様々
な人間関係の絡みのなかから、あるべき場所に立ち返ら
せられるという受動的な世界観であり、こうした宗教的と
も言える調和的世界像は、人間が積極的主体として自ら
の欲望のもと他人や世界を操作しようとする——そして
そこでは、人間は様々な社会的障壁のもと互いに隔てら
れている——近代的な目的原因論的世界像とは対照的な
ものなのである。私はこうした世界観に魅せられ、大き
なノスタルジーを感じ、またシェイクスピア自身がエピ
ローグの道化の歌によって、そうした世界観の虚構性・
終焉を観客に意識させるとき、知らぬうちに頬に涙が
伝っていたのだった。

ところがその後、私は失われた調和的世界像へのノス
タルジーが、自分だけのものではないことに気づくよう
になった。たとえば近年の映画で、無関係だった人間た
ちが運命の不思議な糸によって結ばれていくという構成
の作品が数多く見受けられる——メジャー作品に例をと

れば、『クラツシユ』や『バベル』などもそうだらう。
大きな物語と社会的韌帯を失った現代人は、いやおうな
くそうした世界観に惹かれていくらしいのである。

ところで、その後の私の研究者としての人生は、幾分
ともシェイクスピア喜劇の登場人物と似たような行程を
辿ることになる。私が選択したモリエールフランス古
典主義演劇は、外見こそシェイクスピア演劇とよく似て
いるが、そこで展開される世界像は近代的なものだった
のだ。古典主義演劇が栄えるのは17世紀後半になってか
らだが、その半世紀のあいだに「科学革命」が生じ、近
代的な機械論的世界観が宗教的調和的世界観を駆逐した
のである。それゆえ、私が自らが魅惑され演劇を研究す
るきっかけとなったルネサンスⅡバロック演劇の研究を
ものすることができたのは、古典主義演劇研究を四半世
紀のあいだ続けた後、近著『演劇の精神史——バロック
からヌーヴェルヴァーグまで』（水声社、二〇〇八年）で、
その世界観である「受動的演劇」を、古典主義演劇の「欺
きの演劇」に對置させたときになってやつとであった。
私は判断の「過誤」から、長いこと運命に翻弄された（？）
のち、やつと最初の魅惑に立ち返ることができた。これ
も、なんらかの「摂理」なのだらうか。

パスカル『パンセ I・II』(前田陽一訳)

本城 勇介 [工学部]

あれは高校2年生の3学期のことであるから、今から40年近く昔の話になる。午前中の最後の授業の前の休み時間、いつもの通り昼休みを待たず早弁をしていると、開始のベルと同時に、予定されていた世界史の先生とは別の、見慣れぬ精悍な感じの中年の先生が、いきなり教室に入ってきた。みんなあわてて、食事を中断して、弁当箱を机の下に押し込む。「育ち盛りの君らが、昼休みを待てずに、早弁するのは赦すけれど、俺の顔を見てから、もう一口かき込んで、それから弁当をしまっ奴がいるのは、礼儀に反するな・・・」と、その見慣れない先生は快活に言い放った。クラスの全員が爆笑する。これが私のK先生との最初の出会いであった。K先生は、急用で欠勤された世界史の先生の代わりに、授業に穴が空かないように、来られたので



中央公論新社

I 1575円(税込)
II 1523円(税込)

あった。そのとき先生が話されたのは、世界史のことではなく、フランスのブレイズ・パスカル(一六二一—一六六二)と言う天才と、その主著「パンセ」についてであった。話は、こんな風に始まった。「僕は天才なんだよ。ところで僕によく似た天才が、17世紀のフランスにもいたんだ。パスカルと言う名だ。違いは、パスカルは公に認められた天才だけでも、僕は自称天才なんだ・・・」

そんな話し方で、内容の詳細は忘れてしまったが、パスカルとパンセについて話され、大変強い印象を受け、それからしばらくしてこの「パンセ」を購入し、読み始めた。結局この読書は、大学生になるまで続いた。気に入った部分は何回も読んだ。パスカルは、流体力に関する「パスカルの原理」、また確率論の端緒の一つに

なる賭けに関する研究などで広く知られた、多才な天才であるが、その39歳の短い生涯の晩年に、深くキリスト教に帰依し、キリスト教に人々を導く著作を志し、書き溜めた文書断片の集合が「パンセ」である。構想された著作は未完に終ったが、「パンセ」は、その考察の深さと、優れた文章表現で、多くの影響を与え続けた。パンセの中のもっとも広く知られた一節はおそらく、「人間はひとくきの葦にすぎない。自然のなかで最も弱いものである。だが、それは考える葦である。……だから、われわれの尊厳のすべては、考えることのなかにある。われわれはそこから立ち上がらなければならないのであって、われわれの満了すことのできない空間や時間からではない。だから、よく考えることに努めよう。」であろう。当時私は、「この大きな宇宙、気の遠くなるような長い時間の中で、自分は、なぜ生きなければならぬか。自分の存在する価値は何なのか。」ということを、ぼんやりと考えていた。パンセには、これを巡る多くの印象深い文書断片があった。その一つとして、一般に「中間者」または「二つの無限」といわれる断片を、ごく簡単に紹介しよう。パスカルは巧みな文章で、人間が無限に大きい宇宙の、その長い時間の中に存在す

ることを説明する。そして結論する、「無限のなかにおいて、人間とはなになのであろうか」。一方でパスカルは、我々一人ひとりの中に、もう一つの虚無に向かうマイナスの無限を見る。我々一人一人は、またそれが虚無に比べれば宇宙の総体であるとも言える。我々は無限でないと同時にまったくの虚無(ゼロ)でもない、中途半端な中間の存在である。「人間というものは、いたい何なのだろう。無限に対しては虚無であり、虚無に対してはすべてであり、無とすべての間である。」今思えば、理系の学生には、いかにも説得力のある文章である。

私は結局「パンセ」に導かれて、聖書を読むようになり、大学生時代にキリスト教の信仰を持つに至り、それは今日まで続いている(つまり、パスカルが予期した通りに「パンセ」を読んだことになる。)このことは真に大きな影響を私の人生に与えた。「パンセ」に出会わなければ、まったく異なった人生を歩んだと思う。K先生には、大学院の学生時代、数回自宅に伺い、楽しくお話しした。いくつかのエピソードもあり、またその後紹介されて愛読した書物もある。しかし、紙面も尽きたので、またの機会としたい。

ドストエフスキー

『罪と罰』（上・下 工藤精一郎訳）

桑田 一夫（人獣感染防御研究センター）

私は、小学生のころ、毎日田んぼで農作業ばかりしていました。小4のころ、母が胃の手術で入院したため、家で料理してくれる人がいなくなりました。私がインスタントラーメンを作り、父と二人で毎晩そのみを食べておなかを満たすという食生活を1年ほど続けました。その結果、私は急性腎炎に罹患し、小5と小6の2年間入院しほとんど学校に行きませんでした。その間、母は病室でずっと私のそばにいてくれました。父はバイクに乗って危険な遠い道のりを、毎日のように見舞いに来てくれました。当時は貴重なテレビを病室に持ってきてくれたのも父でした。私は、そのような環境を特に何とも思わず、父が買ってくれたアイنشユタインの相対



新潮文庫

上 660円（税込）

下 700円（税込）

性理論の解説書数冊を毎日読みふけていました。自然界で起きている現象というのは、動かせない絶対的なものでなく、数式を用いて表現することにより、我々の意識の中で適当に動かせるものだ、というような感覚を学びました。当時は、家族も空気のように自然に身のまわりに存在するものだ、と思っていました。そうでないことが分かったのは、両親が死んでから、ずっとあとのことでした。私は、一人っ子で大事に育てられましたが、結局、両親には何もしてあげられませんでした。

中学校では、担任の先生に太宰の「人間失格」とドストエフスキーの「罪と罰」を読むように勧められたので、買って読みました。「人間失格」を読み終えたときは、

世界の景色が変わったように思えました。「罪と罰」を読んだとき、今まで、漠然と疑問に思っていたことが言葉で表現できるようになった、と感じました。

あるシンポジウムで、「なぜ、人を殺してはいけないのですか？」という子供たちの質問に、「あとでよく調べておきます」と答えた文部官僚がいたそうです。我々は、法律があるから、人を殺してはいけない、と思うのでしょうか？それとも他に、人を殺してはいけない、という論理的な根拠を持っているのでしょうか？ナポレオンは多くの人を殺しましたが、彼は人殺しではなく、英雄として扱われています。では、国家は人を殺してもい

いのでしょうか？先の太平洋戦争では、特攻隊に自ら志願し、残った仲間に家族や子供、日本の未来を託し、戦闘機に乗って米国の艦隊に体当たりし、散って行った人たちがいます。私たちは、彼らから託された日本の未来を、どれだけ真剣に見据えて生きていますでしょうか？人間には寿命があり、殺さなくても時がたてばいつかは死に、土に還ります。私たちが、命をかけて守りたいもの、それは家族や恋人、そして子供たちではないでしょうか？その集合体が人間の社会です。なぜ、殺してはいけないのか？それは、命をかけて守りたいと思う人たちが必ずいる、あるいはいたからではないでしょうか。

フョードル・ドストエフスキー（一八二一—一八八二）
ロシアの小説家、思想家。一八四六年、『貧しき人々』でデビュー。社会主義思想を危険視され、一八四九年、逮捕、シベリアへ流刑となり、一八五四年まで服役。

他の作品に、『死の家の記録』、『地下室の手記』、『白痴』、『悪霊』、『未成年』、『カラマーゾフの兄弟』などがあり、すべて新潮文庫で読める。

ニーチエの『ツアラトウストラ』を 巡る思い出

小澤 克彦（教養教育推進センター）

僕の中学時代は、マア遊んでばかりだったから見事に高校の入試に落ちこちて、仕方なく、入学時の同級生が卒業時には2〜3人になっていったという落ちこぼれの高校に通っていた。すごかったなあ、新校舎が建ったらアツという間に「いたずら書き」で覆^{おぼ}われたものなあ。校長の嘆きと怒りの全校集会があったなあ。誰も聞いちゃあいなかったけど。

クラスなんてプロレス会場みたいなものだった。でもそこで、さまざまの同級生のバカや悲しみや苦悶も見て、よしやあいいのに左翼思想にかぶれてみたりして、しかしそれでもあつけらからんと三年間を脳天気^{なまげ}に過ごしていた。



岩波文庫

上 693円（税込）
下 798円（税込）

卒業して、左翼かぶれだったのだから大学にでも行くかとか大それた考えを持って、だけど、当り前だけ入試に太刀打ちできる訳もない。大体、この高校から大学入試など受けたのは2〜3人だもの。どんな大学だっ入れる訳もない。やむを得ないから浪人して、高校一年の教科書から勉強することにした。かたわら、「法律を」と思っていたから六法全書を買って、「憲法」を丸暗記などしていた。でも、受験した法学部の試験の何処さがしても憲法の問題は「問もでていなかった。バカだねえ、こんな勉強で「法学部」受かるわけないだろ。だけれどもうさらに二浪を、とは親には言えない。で、幸い英語は何とか追いついたので、そこで「文学部」に

志望変えして某私立大学に滑り込んでしまった。良く入られてくれた。感謝だ。そこで出会ったのがニーチェの『ツアラトウストラ』だったのだ。滑り込んだ手前、本だけは読みまくったね。でもこれを読んだ時は痛烈だった。後年、思想書をあれこれひねくり回すようになったけれど、この最初の痛撃ほどの体験は二度となかった。ここには「超人の思想」が語られている、といわれる。確かにそれで良い。しかし、その「超人」のとらえ方が問題で、ここにさまざまの理解がでてくる。この『ツアラトウストラ』という本は、深淵な思想を語る「哲学書」というよりむしろ「小説」的だ。だから読み手に応じてさまざまに捕らえられ得るといって性格を持つている。

大学一年の僕がここにみたのは、「生きること」への焼け付くような熱情だった。高校の、一人二人と苦悶と悲しみに顔がゆがんで去っていった仲間の顔が思い出さ

れた。負けてたまるか、と思った。現状に居座ることなく、言い訳せず、既存の価値だけにすぎたのではなく、自由に、強く、高く、美しく生きていこうとする意志をツアラトウストラは謳^{うた}っていた。こんな生き方はできない。こんな訳にはいかない。しかし、「そうは行かないからこそ、そう考えてみる」といわれているようだった。こうしてニーチェの著作をあさっては読んだ。しかし結局、そのニーチェは「古代ギリシャ研究者」から始まっていただけに、「すべては古代ギリシャにある」と思った。そうして僕は古代ギリシャへと駆け上っていった。燃えるようにギリシャ語を勉強し、しかし時に崖からズリ落ち、またはい上がり、古代ギリシャに埋没してきた。僕は正しかったと思う。ツアラトウストラの原点・モデルは、古代ギリシャ悲劇の主人公たちにそのまま見いだせるのだから。

フリードリヒ・ニーチェ（一八四四—一九〇〇） ドイツの哲学者、古典文献学者、思想家。スイスのバーゼル大学教授となり、処女作『悲劇の誕生』を出版。作曲家ワーグナーに心酔するが、のちに決別。一八八九年、精

神に変調をきたし、狂気のうちに55歳で他界。彼のキリスト教批判、形而上学批判は、その後の思想に大きな影響をおよぼす。他の著作に、『善悪の彼岸』、『道徳の系譜』、『この人を見よ』などがある。

『詩経』 「中国古典文学大系」第15巻 (目加田誠訳)

平凡社

安東 俊六 [教育学部]



私の『人生を決めた書物』との出会いは、正確にいえば著者との出会いであるといわなければならない。

大学に入ってすぐの頃であった。書店の店頭で岩波新書の『詩経』が目にとまった。高校の教科書で読んだ「桃夭」以外には何も知らなかったのだが、なんとなく読んでみたいと思って買い求めた。

『詩経』とはこういうものだったのかと真に面白く読んだが、当時の私は、著者がどのような方かというようなことには、何の関心も持たなかった。

やがて教養課程の1年を終え、専攻を決めることになったとき、ある方が「もう専攻は決まったのか」と声を掛けて下さった。この方は私の通った高校で講師をな

さった後に大学院に進まれた方で、「目加田先生に会わせてやろうか」と言ってお下さった。私は、この時初めて、岩波新書『詩経』を書かれた目加田先生が自分の通う大学におられると知り、驚いた。

お目にかかったその日、先生は研究室の方たちと一緒にお茶を飲み連れ行ってお下さった。そのときの雰囲気は実に和やかで、話題は魅力に満ちたものであった。この先生の下で学べたらさぞ楽しかろうと思ってお、私はその場で中国文学を専攻することにした。

恩師は私の卒業の年に退官されたので、講席に列なつたのは僅か二年半だったが、その後も年に何度かは荻窪や大野城市のお宅にお邪魔して、お話を伺った。それは

師がお亡くなりになるまで、28年間続いた。

私は『詩経』の研究者にはならなかったが、恩師にめぐり合った縁が『詩経』であったので、今でも時間があれば恩師の訳の『詩経』を読む。恩師の訳は、『詩経・楚辞』

(中国古典文学大系・平凡社)に収められていて、附属図書館の開架の920の棚にある。

一度読んでみられることをお勧めする。

目加田誠 (一九〇四―一九九四) 山口県生まれ。東京帝国大学文学部卒業。九州大学、早稲田大学教授を歴任。

専攻は中国文学。『目加田誠著作集』全8巻が、龍溪書舎から出版されている。

孔子『論語』

森田 晃一〔留学生センター〕

失敗すること、迷うことの多い青春だった。生き方の基準を求めて「人生の書」を繙く日々が、そこにはあった。

その頃、柳田邦男のノンフィクション作品である『ガソリン50人の勇氣』（文春文庫に収録）という本に出会った。その書の「あとがき」に興味深いシーンが記されている。柳田が発した「死とは何か」という問いかけに対し、当時国立がんセンター研究所長だった杉村隆は「死とは、その人の人生が短期間に integrate（インテグレート、集積）されて出てくるものではないですか」と答えている。死の時期が、もしもそのようなものであるならば、どのように生きて行けばよいのだろうか。惑いつつ、本を漁りながら毎日を通す私に、本稿で紹介する『論語』



講談社学術文庫

1200円（税別）

は大きな示唆を与えてくれた。

『論語』は、孔子の言葉や行為、門人たちの言葉、そして孔子をめぐる問答などを集めた言行録である。約500の短い章が、「学而第二」から「堯曰第二十」までの20篇に、内容・形式上体系的ではなく、分類されている。孔子は、紀元前6〜5世紀の春秋時代末期、（中国）魯の国に生まれた人である。長命にして人生70年を超えたが、その人生は、自らが理想とする世界の実現を目指しての、波瀾に満ちたものであった。

『論語』の一章を次に挙げよう。私が、心動かされた一章の一つである。

「君子は能くする無きを病む。人の己を知らざるを病

まず（教養人は、自分の力量がまだまだ不足であること）をはばかる。他者が自分の力量を知らないからといって思いわずらわない」（『衛霊公第十五』、加地伸行訳注『論語』（講談社学術文庫）より）とある。努力を重ねることの重要性を述べた章である。しかし、努力した成果が認めてもらえないことも、現実には間々あろう。それは、憂いではないのだ。このような情況に置かれることの多い私にとつては、今も、この章は救いとなっている。

ところで『論語』は、簡潔な文章の集まりであるため、注解する人によって部分的に解釈が異なっている。その故もあって、『論語』の研究書・解説者は無数にある（私も、『論語』について記した本を、体系的に読んではいない）。『論語』と孔子への評価も様々である。また私自身も、生き方の基準を、全面的に『論語』に依拠（いきよ）してい

る訳ではない。例えば、和辻哲郎が、『孔子』（岩波文庫）という本の中で、孔子の教説は「死や魂や神の問題を重視しない」と記しているが、私のこれらに対する考え方は別のところにある。

それでも『論語』は、私にとつて心の一書である。読むにあたっては、まず、岩波文庫や講談社学術文庫などに収録されている、定評あるテキストから始めるのがよいだろう。あるいは下村湖人が、『論語』の精神を後世に伝えたいという想いで著した『論語物語』が、『論語』本文に進む前段階の、よき導き手となってくれるかも知れない。

私は、『論語』のような古典を、各人がそれぞれの個性に合わせて、人生に活かしてみること、それが重要だと思ふのである。

孔子（前五五——前四七九） 中国、春秋時代の思想家。

儒教の始祖。名は丘、字は仲尼（ちゆうじ）。魯国（山東省）

に生まれる。56歳のときに諸国を巡り、70歳で故国に戻って、教育と著述に専念する。

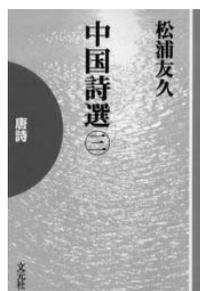
松浦友久

『中国詩選 三 〈唐詩〉』

松尾 幸忠〔地域科学部〕

高校の頃より中国及び北アジアの歴史や文学に関心をもち、関連する書物を見つけては目を通すようになった。特に心を惹かれたのは漢文の授業で、そこで触れる中国の文言文の世界は魅力に溢れ、将来この様な文章が書けるようになりたいなどと思ったものである。中でも漢詩に描かれる風景描写、恋愛、友情、社会批判などは、日本の韻文学である和歌とはまた異なった趣があり、とりわけ新鮮な印象を持った。そのうち教科書に載っている作品だけではもの足りなくなり、自ら漢詩に関する書籍をいろいろと購入するようになったが、その中で出会ったのが標記の書物である。

漢詩といえば代表的なのは唐詩である。唐詩関係の書



現代教養文庫

物で高校生でも読めそうなものを幾つかながめてみたが、多くはありきたりな通釈・解説を施したもののばかりであった。その中であって偶然手にしたこの書は、ひと味違うものを持つていたのである。まず詩の通釈の文章がよい。ただ単に意味を解釈するだけでなく、言葉のリズムをよく考えて訳文が作られている。今から思えば、この言葉への感覚の鋭さは、著者が後にリズム論に関する専論を書くに至る基礎となるものであったのだ。訳文の好し悪し一つでも原詩への魅力に影響が出る。この書でまず学んだのは、言葉のセンスの重要さということであった。

次に大きな魅力を感じたのが詩の様式と表現機能につ

いての解説であった。古典詩の様式としての近体と古体、近体の中の絶句・律詩などは知っていたが、それぞれが表現機能としてどのようなものを持っているかなどは全く考えたことがなかった。例えば律詩の表現機能について次のように言う。「律詩の基本的性格は、第一にその「対偶性」にある。物ごとを徹底的にへ対の形でとらえていくという性格である。中央に二組の対句が必要とされること、その対句表現の巧拙こそ律詩の生命がかかっていることは、律詩における対偶性重視の表徴である。……対偶性に徹することは、律詩の全体にへ整合性∨という第二の性格を与えることになる。……そしてまた、この対偶性と整合性は、第三の性格として、イメージや発想におけるへ完結性∨を生む。物ごとがつねに対の形で示され、安定したバランスを保って表現されることによって、そこに表れた詩的イメージは、——対応す

べき他者を求めて流動するよりも——その対偶と整合のなかで、みずから完結的にまとまりやすい。律詩という詩形が、……内部での粘着力や構築力を大切にするのは、こうした原因からである。」ある様式の作品を読んだときになんとなく感じる、他の様式との違い。そのような感覚次元での問題を、できるだけ客観的・論理的に分析し、解説する。この様な視点からの解説は当時の自分にとって、極めて斬新かつ驚きに満ちたものであり、また納得のいくものであった。文学鑑賞を単なる印象批評の域にとどめず、論理で切り込むことで学問研究の面白さというものを感じさせてくれる。中国古典詩の一つの題材として、そこからいろいろな思考方法を呈示してくれたこの書は、まさに自分にとって、学問の入り口へと導いてくれた最初の書物であった。

松浦友久（一九三五—二〇〇二） 早稲田大学大学院文学研究科博士課程修了。専門は、中国古典文学・日中比較

詩学。他の著書に、『漢詩—美の在りか』（岩波新書）などがある。

岡倉天心『茶の本』とグールド

野元世紀〔教育学部〕

学生時代の土曜日は、午前中気象庁の図書室で気象データの収集を行い、午後は神田の古本屋街に出かけるのが日課であった。大手町の気象庁から神田神保町はわずかな距離で、散歩気分であつた。15分も歩くと古本屋街が見えてくる。ここに「明倫館書店」という名の自然科学の専門書を扱う店があつた（現在ももちろんある）。国内外の大気科学に関する名著も揃つていて、店内はまさに宝の山であつた。この店で購入した気象学の本や「岡田武松伝」、「寺田寅彦全集」、岩波の「基礎数学」全巻は、今もわが家の書庫に鎮座している。また、この店にはドイツの高校の地学の教科書も置いてあつた。内容は分かっているし、図表や写真も多数あつて、私の語学力以



角川ソフィア文庫

660円（税込）

上にすらすらと読むことができた。大学院の入学試験でドイツ語の得点が高かつた（らしい）のは、この本のおかげであると思つている。

神田には、様々な分野を専門に扱う本屋が軒を連ねていた。中国語の専門書を扱う店もあり、「物候学」という名著を手に入れることができた。人文科学の専門店ではアリストテレス全集や岡倉天心にまつわる本をよく立ち読みした。天心の「茶の本」に、「自分の偉大なるものの小なることに気がつかぬものは、周りの小なるものの大なることが判らない・・・」という下りがある。当時の欧米の帝国主義的発想を痛烈に批判した文章であるが、大学に勤めてみると、この言葉に当てはまる事例の

多さに苦笑してしまふ。

明倫館書店近くの路地を入ったところに小さな喫茶店（残念ながら名前は忘れてしまった）がある。買った本をここで読むことも当時の私の習わしであった。BGMのバロック音楽を聴きながらの読書はまさに至福の時間で、コーヒーマ杯で2時間くらいねばったものである。

店主も嫌な顔ひとつしない。かかっている曲もすばらしく、天才ピアニスト、グレン・グールドの存在もこの店で知ることができた。以来、レコード店巡りも始まってしまった。余談ながら、歴史的名盤といわれる一九五六年録音のバッハ・ゴルトベルク変奏曲の十三変奏に一ヶ所ミスタッチがあるように思えてならない。しかし、音楽評論家の指摘はない。グールド流の解釈の音なのであろうか。30年以上も経った現在でも気になっている。私が岐阜大学に赴任した年の10月に、残念ながら50歳の若

さで彼は他界した。

幼年期から現在に至るまで、進路を決定するような、あるいは進路を変えるような書物には出会うことができなかった。しかし、本が集まる空間と、本に触れるゆとりのある時間を学生時代に保つことができた。これもとても価値のあることだと思う。

近年のインターネットの充実は大変便利である。新書も古書もネット上で検索し、注文することができる。早ければ翌日には宅配便でその本が研究室に届いている。私のゼミの学生もよくインターネットを利用して本を購入しているらしい。ところで、今の東京周辺の学生にとって神田の古本屋街はどのような存在なのだろうか。書店巡りをしているのであろうか。それともすでにウェブ上の世界になってしまったのか、少々気になっている。

岡倉天心（一八六三—一九一三） 文部省に勤め、フェノロサとともに日本美術を調査する。27歳で東京美術学校（現東京芸術大学）の学長となるが、スキヤンダルに

より辞職し、日本美術院を設立。日本美術史学の先駆者。『茶の本』は、一九〇六年、ニューヨークで英語で出版される。

内村鑑三『家庭・人生・青年(学生)・教育・読書・天職・職業・結婚・労働・事業・死』とのかわり

内村鑑三信仰著作全集第20巻(山本泰次郎編)

湯川敏信【教育学部】

内村鑑三の膨大な著作をまとめたいわゆる選集・全集・著作集はいくつかあるが、代表的なものとして、執筆年代順にまとめられた岩波書店発行の全集(全四十巻)と、主題別に編集された教文館発行の信仰著作全集(全二五巻)・聖書注解全集(全十七巻)・日記書簡全集(全八巻)・英文著作全集がある。私は岩波の全集と教文館の信仰著作全集を持っているが、この中から若い人向けに強いて一冊をと言われれば、「家庭・人生・青年(学生)・教育・読書・天職・職業・結婚・労働・事業・死」に関する珠玉の作品が一冊に収められている教文館の信仰著作全集第二十巻をお薦めしたい。

内村鑑三(一八六一年(文久元年)―一九三〇年(昭



教文館

3885
円(税込)

(和五年)は無教会主義の預言者のキリスト教信仰者にして伝道者であり、世界的思想家、著述家である。おびただしい数の英文を含む著作を残しているが、創造主たる神の前に立つ一人の人間としての存在を十分認識した敬虔な信仰者として、一個人から国民・国家・世界にわたるおよそ人が遭遇しうる課題を生涯をかけて追求し、聖書に基づく信仰によって解決の道筋を指し示しているが故に、時代を越えて、読む者の心に感銘を与え、生きる力と勇気と何よりも希望を与えてくれる。文語調であるが、決して難解ではなく簡潔にして的を得ており、詩であるとさえいわれる。以下に一部を引用してみよう。

「人生の目的は神を知るにある。その他にない。金を

ためるのではない。哲学と美術とを楽しむのではない。神を知るにある。これが人生の唯一の目的である。この目的を達せずして、人生は全く無意味である。…この目的を幾分なりと達せずして、最も成功せる生涯も失敗である。…人生唯一の目的たる神を知ること…神を知るためにキリストを知ること…キリストを知るために聖書を探ること。ことに旧約聖書を探ること。…キリストの旨に従うこと。すなわち十字架を担うて彼に従うこと…」（256―259頁）「教育の目的は人を作るにある。そして人たるは、学者たり、知者たり、成功者たることでない。おのれに足りて他に求むるの必要なく、窮乏の内にあるも感謝満足の生涯を続け得る者である。わが文部省は：かかる人を作り得しか。善き国民を作らんと欲して善き人を作り得ざりしがゆえに善き国民を作り得なかつたのではあるまいか。…」（68頁）「…法律作るを得べし。内閣作るを得べし。鉄道作るを得べし、小説作るを得べし。何事も何事も作るを得べし。ひとり作り得べからざるは人なるがごとし。…しかり、人を作れよ。そは一人を作るは、憲法を作るよりも偉大なる事業なればなり。

何びとも憲法または内閣を作るを得べし。されども人物のみが人物を作り得るなり。…人物製作は克己献身の業なり。…日本も完全なる法律と整頓せる軍備とをもって倒るる時なきやも計られず。されども確実なる人物にしてわが国に充滿せんか、わが国の将来は富士山の堅きがごとく固し。人をつくれよ。しかり、人物を作れよ。」（70頁）

小学生の頃市の図書館から聖書物語を借りて以来三十有余年の魂の放浪の末に、両親との同居に際して家内が基督者となり、母の末期癌を機に、私自身、約二ヶ月間起き上がれないという試練にあった。文語聖書を改めて読み始めて信仰告白までは長くを要しなかった。教会からの帰り道、私の体は殆ど癒されていた。奇跡であった。私達の家庭が内村の言うクリスチャン・ホームとなった。ある姉妹を介して矢内原忠雄著「イエス伝」（角川選書）を知った。戦後二代目の東大総長である矢内原は内村の弟子。彼により無教会を知り、ついに内村鑑三にたどりついた。私の世界観は内村―矢内原―富田和久（故京大教授（物理学）矢内原の弟子）の著書によって培われた。

吉野源三郎

『君たちはどう生きるか』

益川 浩一〔総合情報メディアセンター〕

『君たちはどう生きるか』を、私をはじめて手にとつて読んだのは、大学二年生の時です。

全学共通教育(教養教育)のある講義を受講しました。その講義の最初の時間に、講義を担当されたS教授が、学生全員に向かって、「読んでみるとおもしろいよ。」とお勧めの本として紹介してくれたのが、『君たちはどう生きるか』です。

私は、元々、不登校の問題やいじめの問題について社会的に研究したいと思ひ、教員養成系ではない教育学部に入学しました。したがって、大学では、「教育社会学」を専攻したいと思っていました。

S教授のご専門は、「社会教育学・生涯学習学・成人



岩波文庫

735円(税込)

教育学」でしたので、最初はそれほど興味もたず、ただ講義を聴いていたのですが、S教授の明晰な、しかし、やや難解なお話には、だんだんと酔いしれていくようになりました。

講義もあと数回を残す頃に、「こんな興味深い講義をされるS教授のお勧めの本ならば、一度、読んでみよう。」と思ひ立ち、『君たちはどう生きるか』を大学生協の書籍部で購入し、むさぼるように読んだ記憶は、いまだ、私の中に鮮明に残っています。ちなみに、S教授は、その後、私の指導教官となり、私の研究の師匠になりました。今でも、公私に渡り、大変お世話になっています(結婚式の仲人さんもしていただきました)。私は、S教授と

の出会いをきっかけに（S教授のもとで研究がしたいと思ふようになり）、研究分野を「教育社会学」から「社会教育学・生涯学習学・成人教育学」に変更したのです。

『君たちはどう生きるか』は、著者の吉野源三郎（哲学者）が、戦前の昭和12年に、『日本少国民文庫』（新潮社）という中高校生向けの啓発シリーズの一冊として書いたもので、いわば、「少年のための倫理の本」です。

題名を見ると、何だか「説教臭そう」に感じるかもしれませんが、決してそのようなことはありません。主人公のコペル君（本名：本田潤一、中学2年生）が、日常起こったこと、考えたこと、友人との悩みなどを、コペル君の叔父さんとノートを介してやり取りする中で、コペ

ル君が人間として成長していく姿が描かれています。

内容は平易で、小学校高学年くらいならば理解できると思いますし、戦前に書かれた古い書物ですが、大人が読んでも、また、戦後60年以上経った今、読んでみても、非常に読み応えのある内容だと思います。

最近では、講義の教科書すら購入しない学生もいると聞いていますが、本は学生のみなさんの「宝」になります。学生時代は、自らの専門分野に狭く閉じこもることなく、多様な分野の書物を、幅広く読まれることをお勧めします。そのことを通して、自らの物の見方や考え方が鍛えられ、自らの世界観が形成されていくものと思います。

吉野源三郎（一八九九—一九八一）『君たちはどう生きるか』

は、一九三七年、明治大学に講師として赴任した三八歳のときに刊行された。第二次大戦後、岩波書店の月刊雑誌「世界」の初代編集長となり、「戦後民主主義」

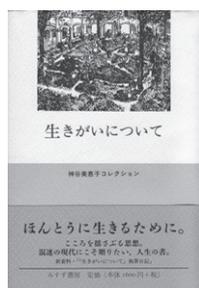
を標榜。岩波少年文庫を企画する。他の著書に『同時代のこと ヴェトナム戦争を忘れるな』（岩波新書）などがある。

神谷美恵子『生きがいについて』

鎌部 浩【工学部】

ほとんどの人がそうであるように、私にもこれからの人生をどのように歩んでいけばよいのかについてかなり真剣に悩んだ時期がある。しばらく前に引越しをしたときに、そのような時期に書いたノートを見つけたが、当時考えたことが赤面せずには読めない文章で延々と綴られており、自分でも驚いてしまった。そのノートと一緒に見つけたのが、当時読んでいた神谷美恵子著「生きがいについて」である。少しページをめくると最初に読んだときの感動が蘇^{よみがえ}ってきた。自分のノートは誰かに読まれると困ると思^{おも}い躊躇^{ちゅうちゆ}しながらも捨ててしまったが、この本は今も本棚にある。

この本はそれまでに読んだ、生きがいに関する本とは



みずず書房

1680円（税込）

違っていて（実は生きがいについて書かれているほとんどの本が、この本を引用しているということであとで知った）、つとめて客観的に生きがいを分析し、その本質を見つけようとしている。ある仮説を述べるために、その仮説をたてるにいたった例が数多く述べられているが、それらは過酷な出来事に遭遇^{そうごう}した人達の真実の声であるので心に残る。

この本の最初の数章では、生きがいとは何であるのかという問いについて考察し、そのあと生きがいの喪失、探索、再発見、人生の再生へと続いていく。その語る調子には人間には大きな絶望からでも再生できる能力があるという著者自身の強い確信と、そうした人間への信頼

が感じられる。

私は大学に就職してしばらくたってからこの本に出会った。研究を含めていろいろなことで行きづまりを感じ、今の仕事を続けるべきかどうか、そもそも何故研究するのかなどについて、自分なりに真剣に悩んでいた時期であった。そのようなときに、あまり内容を確認せずにこの本を買ひ、始めの教章を読んでいるうちは、買って失敗だったと思っていた。しかし読み進めるうちに、次第に段落毎に感銘を受けるようになっていった。今回読み直してみると、私はこれまでこの本に述べられているような方法で、つまり「生きがい」の観点から自

分や周囲の人を理解しようとしていたことに気付いた。この本を読んだときのことは長らく思い出し出していなかったが、思っていた以上に影響を受けたらしい。

この本には、生きがいを持って生きていくための具体的な方法は述べられていない。悩める読者がこの本を読んでも、今日からどのようにすればよいのかについて、直接の回答を得ることはできない。しかしながら不思議なことに、悩みや苦しみに正面から立ち向かおうとする気持ちや気力を持たせてくれる。ある書評には「読後に神谷美恵子に会って話がしたくなる本だ」とあったが、まさにその通りである。

神谷美恵子（一九一四―一九七九）精神科医。岡山

の長島愛生園でハンセン病患者の治療、研究を行う。

「神谷美恵子著作集」全10巻がみすず書房から出版さ

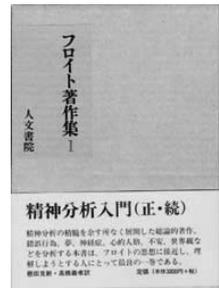
れており、『生きがいについて』はその第1巻にあたる。兄の前田陽一はバスカル『パンセ』の訳者。

ジグムント・フロイト

『精神分析入門(正・続)』フロイト著作集第1巻

深尾 琢「医学部」

この本を読んだのは、私が医学部の学生になってまもなく、18歳か19歳の頃である。当時はまだ何科を専攻するなど考えたこともなかった。ただこの本が家の本棚にあったこと、精神分析と言えば性の学問、少なくとも「性心医学」とのイメージがあったこと、さらに若者らしい自己内省的な志向がいまって興味を引き付けられたのである。しかし、読み終わってみて何ともすつきりしない感覚が残った。活字がびっしり埋まった400ページの長文は「錯誤行為」「夢」「神経症」の3つに分かれ、その半分が前の2つに占められていた。私には、言い間違いや書き間違い、あるいは夢といった瑣末な現象になぜこれほどのページを割くのか理解できなかった。また、後



人文書院

4725
円(税込)

半の神経症理論は「入門」の割に随分複雑で難しく、心を易しく理解しようとする淡い期待を打ち砕かれた。そもそもこの本は、フロイトが現場の医師を含む聴衆に対して、精神分析を未完成な学問として紹介した講義に基づいていた。

その後、私は卒業間際に精神科を選んだ。そして、再びこの本を手にとったのは、時間的余裕ができた30歳過ぎの頃である。精神科医のたしなみとして再挑戦してみると、今度はいたずらに難解だとは感じず、むしろ日頃の臨床への豊かな示唆に胸のつかえが取れる思いであった。驚いたのは、後世の著者達から学んだ理論や技法のものが、ほとんどこの本に凝縮されていたことである。

出版から80年を経てもお本質に変わりがないことを知り、原典に直接当たることの重要性を思い知らされた。また、錯誤や夢が重要なのは、それが病気ではなく誰でも体験できる現象であり、それでいて心の奥底、すなわち無意識を明らかにする最良の素材であるためだと分かった。いや、この本には元々はつきりとそう書いてあった。ただ、なるほどと思えるのに、私には一定の人生経験が必要だったのである。その他、フロイトの学者としての姿勢にも強い印象を与えられた。これでもかとしていほどに実例を取り上げ慎重に自説を組み立てるだけでなく、自説に不利な現象から目を逸らさず、知ったかぶりをせぬよう自らを強く戒め、誤りに気付けば即座に自説を改める姿勢。真理に対する愛のみを貫く学者魂を、まざまざと見せ付けられた。このような本に再会した喜びのせい、著作集全11巻の残りを2ヶ月あまりで一気

ジグムント・フロイト（一八五六一—一九三九）オーストリアの精神分析医、研究者。夢の分析を通して、「無意識」の世界を探求し、性理論を構築。のちの精神医学だけでなく、シュルレアリスムなど、思想、文学、芸術

に読み進めることとなった。

それから10年、この第1巻を繰り返し読み直してきた。最近では若い人達に誘われて一緒に読むこともあるが、不思議と読み飽きることはない。彼らが私の不確かな理解を教えてくれるだけでなく、以前読み流した文章に別の意味を見出したり、フロイトが解けなかった疑問に辿り着いたり、と新たな発見に事欠かないためである。深い思索に裏打ちされた本は、こちらが目を閉じてしまわぬ限り無数の問いを投げかけてくる。そんな本に若くして出会いながら長く本棚に眠らせておいたことを悔やみつつも、私には必要な時間だったと自らを慰め、いまだに著作集に取り組んでいる。

（これからの読者には、現在刊行が進んでいる岩波書店の新訳、「フロイト全集」をお勧めする。）

にも大きな影響をおよぼす。『精神分析入門』は新潮文庫、中公文庫でも読める。他の著作に『夢判断』（新潮文庫）、『エロス論集』（ちくま学芸文庫）など、文庫で手軽に読めるものもある。

河合隼雄 『ユング心理学入門』

培風館

1365
円（税込）

鈴木 壯「教育学部」

「人生を決めた書物」と言っても、単にその書物に出会ったから人生が決まったというわけではない。その書物に出会うまでにさまざまな体験をし、それがあったからこそ出会った書物が大きな意味を持っていたと思う。それは、自分自身の体験を結実させ、その後の人生の指針を象徴的に書き記してあるものだった。

さて、その書物に出会うまでの人生は、中学から始めたバスケットボールを中心とした生活であった。私の力量からするとそれ相応の良い競技成績を挙げてはいても、何かおさまりの悪い感覚がいつも残っていた。それは、状況に応じて即座に判断しながらプレイをしていかねばならないという競技特性を持つバスケットボールを



やっついて、私の内向しがちな性格のために、ミスや問題があると考え込んでしまい、即座に判断し行動できないことが気になり、「自分はダメな人間」と思っていたからなのだ。それ相応の競技成績を挙げてても、考え込まないでできることが良いことだと思っていたからなのだ。

大学院に進学し、競技選手としては引退し、スポーツ心理学を専攻するようになって、このような考えはあまりなくならなかった。それでも（このような背景があったからだ）後には思ったことだが、修論は「スポーツ選手のアイデンティティ形成」というテーマを選び、学外で開催された臨床心理学関係のワークショップや研

修会等に時々出かけてはいた。そうするなかでプロイト、エリクソン、ユング等の書物に親しむようになっていた。

冒頭に挙げた「ユング心理学入門」に出会ったのは、大学院修士課程を終え、就職を間近に控えた二月頃だったと思う。自分自身を否定的に見ていたのが、その書物に出合うことで、その見方を大きく変えるきっかけとなった。その中に「タイプ論」についての章があった。ユングは人間の一般的態度として「内向・外向」という2つの態度があると考え、関心や興味が内界の主観的要因に重きをおいているときには内向的といい、それと逆に、関心や興味が外界の事物や依存によって特徴づけられるときに外向的と呼び、両者を区別している。詳細は「ユング心理学入門」を読んでもらいたい。内向型の特徴が自分に当てはまっていた。たとえば、内向型はどこかぎこちない感じがつきまとい、こんなことを言ったら笑われるのではないかと思つて黙り：云々とあり、新しい場面で無能力者の見えた人が、慣れるに従つて徐々にその能力を示していき、他の人を驚かさすような深さを示す、等々と内向型の人の特徴が書かれていた。それを自分のことに重ね合わせて考えてみた。それは、これまで

では思つてもみなかつた側面に目を開かせてくれた。ちよつと救われた気になった。

自分自身を肯定的に見るまでには、もう少し時間が必要だったが、それをきっかけに、河合隼雄やユングの著作に親しむようになった。そして、「ユング自伝」（みすず書房）に出会った。とは言つても、すぐに出会つたわけではなかつた。ユング関連の書物を買ひ集めていても自伝を初めから読んだわけではなかつた。まず理論が書いてある書物を読み進めた。自伝は手元にあつても読んだのは、買い求めてから3、4年後だつたと思う。自伝を積極的に読もうとはしていなかつた。読んでみると、大きく心を揺り動かされるものがあつた。最初に読めば良かったと思つた。ユングの内的体験が書かれていた。彼がどのような人生を送り、臨床活動を行いながらどのように思索し、どのようにして理論を生み出したか：等々。

私が挙げた2つの書物は私がカウンセラーとして仕事をしていく上で土台となるような非常に大切なものとなつている。

上野英信『地の底の笑い話』

杉原利治〔教育学部〕

自分はいつたい何者だろうか？若いとき、誰もが、一度は思い悩む。でも、そんな問いを発し続けるのはとても苦しい。だから、こんなもんだと自分に言い聞かせて毎日をおくり、齢を重ねることになる。

一九六〇年代後半は、世界中で、若者たちの社会に対する異議申し立てが、激しくなされた時代である。その渦中、私たちは否応なしに、自分はいつたい何者だろうか、と問いつめざるを得なかった。昂揚感と空虚感の狭間で、私は1冊の本に出会った。上野英信『地の底の笑い話』である。一九六七年に発行されたこの本は、想像を絶するほど過酷で絶望的な毎日をおくっている炭鉱労働者の、闇の底からわき上がってくるような笑い話を集



岩波新書

735円（税込）

めていた。死と隣り合わせの悲惨な生活を描きながら、なぜか読む者にある種の希望への祈りを感じさせてくれるのである。それが、著者上野英信のまなざしの優しさによるものだと思つたのはずっと後になってからだ。京大文学部を中退して、炭坑に入り、九州を拠点に野太い活動が続けている上野英信とは何者だろうか？

一九七〇年夏、私は、上野を訪ねることにした。京都から、列車、船、バスを乗り継ぎ、たどり着いたポタ山の筑豊には、半ば廃墟と化した炭坑長屋が続ぎ、その中に取り残されたように上野の拠点はあった。「筑豊文庫」。「文庫」は、労働運動をカモフラージュするために名付けられたともいう。会社側に雇われた右翼や暴力団の襲撃

から守るため、頑丈に補強された建物は、運動が終焉しゅうえんした当時、北九州の文学・思想運動の拠点となっていた。

谷川雁、森崎和枝、河野信子、上野晴子、石牟礼道子：…戦後史の上で、ひとときわ異彩を放つ思想家やフェミニズム、社会運動の担い手たちの原点が、ここにある。

「文庫」の主、上野英信の原点は、戦争と原爆体験による空虚感であった。そして、自分は何者なのか、との厳しい問いであった。彼は、その問いを、終生続けたのだ。上野をはじめ、「文庫」を囲む書き手たちの文章が、非常に土着的で、しばしば難解でありながら、広く人々の心の奥まで届くのは、その根底に、自分に対する厳しさがあるからだろう。私が、数十年後、アメリカ社会の中で非近代を生きってきたアーミッシュを研究し始めたのも、

「文庫」の人々の方法を自分なりに試したいとの思いをずっともっていたからだ。

戦争や原爆といっても、今の若者にはピンとこないかも知れない。しかし、貧困、人権、差別の問題はいつの世にもある。また、自分が何者であるか、という問いが無くなったわけではない。自分探しの旅は、情報化が進む中で、むしろ長くなり、時には、心のやまいへと向かってしまう。だが、考えてみれば、自分を見つめるには、いろいろなやり方がある。グローバル化が進んだ今だからこそ、地域を拠より所として、自分に厳しく、人に優しくいまなざしで、人間の奥深さに迫る上野の著作に接してみてはどうだろうか。

上野英信（一九二二—一九八七）広島で被爆。京都大学中国哲学科を中退し、九州の筑豊で炭鉱労働者となる。他の著作に、『追われゆく鉱夫たち』（岩波書店）、『天皇

陛下万歳』（筑摩書房）などがある。径書房から、「上野英信集」全5巻が出版されている。

井沢元彦 『逆説の日本史』

愛木 豊彦 [教育学部]

「逆説の日本史」とは、飛鳥時代から始まり、時代ごとに著者の日本史に対する見方を示している本で、二〇〇八年五月現在も週刊ポストに連載中で、江戸時代まできています。

子どもの頃、ポプラ社の偉人伝記シリーズの一冊に「織田信長」があり、何度も繰り返し読みました。特に、桶狭間の合戦のところがお気に入りです。これが歴史に興味をもつきっかけになったと思います。中学生になると、NHK 歴史大河ドラマで放映された「花神」にはまり、幕末にも興味をもつようになりました。こんな感じで、中学生ぐらいまでは、社会は好きな科目でしたが、徐々に暗記が苦手になると、社会が好きではなくなり、高校



小学館文庫 590円(税別)

のときはむしろ嫌いな科目になっていました。

大学生のときは、「竜馬がいく」や「花神」など司馬遼太郎や、いろいろな歴史物を読み、再び歴史に興味をもつようになりました。私にとって、司馬遼太郎の作品は、魅力的な主人公が大活躍するという意味で、「帰ってきたウルトラマン」などと一緒のヒーローものですね。それに対し、いろんなことの繋がりの面白さを教えてくれたのが、みなもと太郎のマンガ「風雲児たち」です。このマンガは、関ヶ原から幕末までを描いていて、これも現在もお継続中です。前半の主要なテーマは関ヶ原と幕末のつながりで、これも私にとっては発見で大きな驚きでした。

数学を勉強しに大学院に通っている頃は、数学の本ばかり読んでいました。数学の文章を読むときには、この言葉の定義は何だ、ここからここへの根拠は何だというのを常に極端に意識しているわけで、それが、体に染みついてしまい、定義や根拠、主張がはつきりしない文章を読んでいると、やたら腹が立ってしまい、この頃、普通の本が読めなくなりました。特に、新聞のAもBも理解できる、だから、AとBはもつと話し合うべきだ、的な展開に拒絶反応が強く、それ以来新聞はほとんど読んでいません。それよりは、嘘か本当かはつきりしないプロレスの方が、よほど信頼できます。

そういう体質だったからかもしれないませんが、文献を引用しながら新説を述べ、分らないことは分らないとする「逆説の日本史」の書きっぷりが好きで、完全にはまってしまいました。同時期、大好きなビートたけしが週刊

ポストに連載を持っていて、それを読むために毎週読んでいて、それが「逆説の日本史」と出会うきっかけになったのですが、当時、山崎浩一も連載していて、これら一連の文章との出会いでもの見方が大きく変わったような気がします。

この本では、元寇^{げんこう}、織田信長、忠臣蔵などに対する著者の説を次から次へと述べ、その考察から、日本人の軍隊観や文学観などをまとめていきます。そして、全体を通して日本人の考え方とはどういうものかを明らかにしていこうとしています。

この本と出合ったおかげで、自分の本業である数学教育においても、なぜ数学を日本の子ども達に教えるのかという問いに対する答えが得られたような気がしています。今の自分のものの見方考え方を支えているとても大事な本です。

井沢元彦（一九五四～）早稲田大学卒業後、TBSの

報道記者となり、一九八〇年に『猿丸幻視行』で第26回江戸川乱歩賞を受賞。『逆説の日本史』は、一九九二年

に連載を開始。現在、文庫版では、12巻まで刊行されている。他の著書に、『言霊』、『日本史再検討』などがある。

マルセル・デュシャン 『デュシャンの世界』(岩佐鉄男・小林康夫訳)

野村幸弘〔教育学部〕

マルセル・デュシャンは、ピカソと同時代のフランスの画家である。とはいえ、早い時期に絵を描かなくなったので、画家とは呼べないかもしれない。一九一四年、彼は絵を描くかわりに、オブジェという「作品」を考え出した。これは既製品を用いたもので、自分で作ったわけではないから、「作品」といつていいのかわからない。けれども、この「作品」がこれまでの美術の歴史を根底からくつがえすことになったのである。

『デュシャンの世界』は、彼が最晩年に自らの考えを語ったインタビューの記録であり、私は専門の美術史学の研究を始めて5年ほどたった夏のある日、この本に出会うことになった。



朝日出版社

彼の生涯と考えは、ほかのどの芸術家とも異なっていた。芸術とはこうであるべきだ、とか、芸術家はこうでなくてはならない、といった固定観念をことごとく打ち破っていた。というより、するりと通り抜けているように感じられた。あらゆることから解放されて、こんなに自由に生き、考え、制作した芸術家がいたことに驚いた。「私は芸術家の創造性など信じません。ほかの人となら変わりはありません。」「人が絵を描くのは、自由な存在でいたいからです。毎朝、会社へ出かけていくのは嫌なのです。」「私には途方もない怠惰が根底にあるのです。働くことより生きること、呼吸することの方が好きなのです。私がしてきた仕事が、将来、社会的観点からみて、

何か重要性を持ちうるとは考えられない。だから、こう言つてよければ、私の芸術とは生きることなのかもしれません。各一瞬、各一回の呼吸が、どこにも描きこまれていず、視覚的でも頭腦的でもない作品になっている。それはある種の恒常的な幸福感です。」

デュシヤンのどの発言を読んでも、すべてが初めて聞いたことばかりの内容であるはずなのに、なぜか私はそれらをすでに知っているような気がした。と同時に、私もまた、過去のあらゆる決まりごと、取り決め、習慣、伝統、常識、固定観念から解放されて行くのを実感した。

こんな芸術があつてもいい、こんな作品があつてもいい、こんな音楽会があつてもいい。こんな研究が、こんな授業が、こんな論文があつてもいい。こんな芸術家があつて、こんな大学の先生があつていい……。

こうして私の脳みそは、かぎりなくところに溶解し、形を変えながら、いたるところへ流れ出したのである。

インタビュ어의最後で、彼は死について訊かれ、こう答えている。「死についてはできるかぎり考えません。

この年になれば（このときデュシヤンは79歳）、だれでも身体に不調を覚えませんが、でも無神論者であると、自分がこれから完全に消滅してしまうということは非常に気になります。私は死後の生とか輪廻りんねなどを期待していません。それはじつに窮屈きゆうくつです。こういうものを信じたほうが楽しく死ぬるかもしれませんが。」

生きることが、呼吸することが、そのまま芸術だというデュシヤンは、このように死からもかなり解放されていたように見える。晩年におけるこの心の平静さは、もうほとんど禅宗の僧侶の悟りに近いように思われる。

マルセル・デュシヤン（一八八七—一九六八） フランスの芸術家。一九一三年、アメリカのアーモリー・ショ

で『階段を下りる裸婦No.2』が評判になる。その後、

絵筆を折り、「オブジェ」を考案したり、チェスに没頭

したりして、制作活動からはなれる。代表作は『彼女の独身者によって裸にされる花嫁、さえも』、『①水の落下②照明用ガス、があたりえられたとせよ』など。

マルクス『資本論』

新日本出版

全 15145 円 (税込)

稲生 勝 [地域科学部]

芥川賞作家の奥泉光が、われわれがしていた国際基督教大学（ICU）の「資本論研究会」のことをエッセーに書いていると僕が知ったのは、そのエッセーを直接読んだからではなく、新聞のコラム欄か何かでの紹介を通じてであった。その紹介には、「資本論研究会」へは、ICUの弱小野球部の先輩に誘われたこと、学生時代から一貫した奥泉の主張ではあるが、「現代における最高の思想書」として『資本論』を今日でも位置づけていることが書かれていた。

その野球部の先輩とは、原さん（現在、立命館大学教員）、岩田さん（現在、会社員）であり、奥泉と僕は、少なくとも入学した年度が一緒という意味では、同期生

である。（なにせ、当時、留年率日本一という大学で、入学時の後輩が卒業時に先輩、ということも珍しくなかったから、こういう言い方になる。）さらに、僕も野球部に所属し、やはり、原さん、岩田さんに誘われ、「資本論研究会」の100人を超えるメンバーのひとりとなった。人数が多いので、空き時間ごとに分科会として行われていた。

僕らは、いろいろな意味で遅れてきた世代だった。僕らのICU入学に前後して、森有正先生が他界した。森先生は僕のいた学生寮の建物内にある教員用住居にお住まいだったが、僕の学生時代は空き家のままだった。ICUでの講義録『経験と思想』を読むことしかできなかった

た。新約聖書学の田川建三氏は数年前にICUを退職していた。僕の専門の生物学に關しても、僕の入学前年に行われた木原均氏の講義も講義録『生物学講義』も読んだだけだったし、篠遠喜人先生も退職した後だった。

しかし、当時、学内には、他大学と同様に、大小さまざまな読書会が存在していた。ICUの特殊性といえ、聖書研究会や森有正の読書会が目立つことだろうが、『資本論』や初期マルクス、吉本隆明、高橋和己、バナール、自然弁証法などの読書会が、実数はわからないが、数多く存在していた。あるとき、聖書研究会だけで、200以上あると聞いたから、友人同士のこじんまりした読書会を含めれば、学生総数より多くの読書会があったことは間違いない。

入学すると、サークルのWhy Don't you join us?のポスターの中にまざってさまざまな読書会の勧誘もあったが、むしろ、勧誘を一切しない読書会のほうが普通だったのではないだろうか。読書会は、口コミで参加するのが普通だったように思える。

ぼくもいくつかの読書会に参加した。「資本論研究会」もそのひとつだった。しかし、『資本論』は、one of

themではなかった。弁証法といわれる論理的—発生的方法で、複雑な有機的な資本主義社会が見事に解明されていく論理展開には、本当の意味での知的興奮を覚えた。マルクス主義サイドの文献は、そのいくつかはティーンエイジャーのときにかじってはいた。しかし、読書会を通じての『資本論』の読解は、まさに体験を超える経験であった。それまで、自然科学のほうが人文・社会科学に比べ、論理的で、進歩が早く、人文・社会科学は遅れていると思っていた僕は、まったく逆であることを思い知らされた。自然科学は、いまだに資本論を得ていない。この認識は今でも変わらない。自然科学における資本論を、というのが僕の人生の無謀な目標となった。

非常に多角的な視点からものを考えているマルクスのような思想家の本は、自分以外の読み方、別の視点を与えてくれるので、読書会形式で読むことに意義は大きい。だが、それだけではない。読書会は、参加メンバーの発想法や人柄がわかることも意義のひとつだろう。不義理にしているが、読書会の仲間たちへの友情は変わらないことを告白しておく。

モツシエ・レヴィン 『レーニン最後の闘争』（河合秀和訳）

岩波書店

竹森 正孝（地域科学部）

「この1年間に読んだ政治学に関連する文献を10冊あげ、そのうちの1点を取り上げて書評しなさい。」

これは、私が大学院修士課程の入学試験を受けた際の政治学の出題内容です。その時にも驚いたものですが、今から思い出しても何とも複雑な気持ちです。私にとつての「人生を決めた一冊」は、おそらくいろいろいる局面で遭遇したはずで、何冊かをあげることが可能ですが、ひとつだけということですから、この受験の際に、いろいろ悩んだ末に取り上げたM・レヴィンの『レーニン最後の闘争』をあげたいと思います。

私の学生時代は、中国の文化大革命、ソ連をはじめとするワルシャワ条約機構軍のブラハ侵攻（民主化を求め

モツシエ・レヴィン
レーニン最後の闘争

たチェコスロバキアの改革運動を軍事力で押しつぶした事件）などがあり、社会主義国のあり方に根本的な疑問が深まり、そうした視点からの社会主義の思想や体制に強い関心があった時代でした。国家主義的な政治・社会体制、言論や思想への強権的な弾圧、大雑把な言い方ですが、ソ連型モデルや中国型モデルの強要などなど。プラスに評価するにせよ、マイナスに評価するにせよ、当時の社会主義諸国の政治は、学生など若者にとっては大きな関心事であったのです。社会主義とは何なのか、なぜ人権や民主主義を蹂躪するようになってしまったのか、内部の矛盾葛藤はないのか。こうした疑問は、当然にこれらの矛盾と正面から向き合った人はいないのかと

いう問題にぶつかります。そんな折に、最初に紹介した試験問題に出会ったのです。『レーニン最後の闘争』を選んだ理由の一端はわかってもらえると思います。

この本は、試験にかかわったというにとどまらず、大学院での、そしてその後の研究生活での私の研究テーマやモチーフと大きなかかわりを持つことになりました。

政治家レーニンが、その人生の最後の段階で、文字通り死を賭して闘った課題、日増しに力を強めていく官僚主義、民族自決と諸民族の自由な同盟に反する集権主義、

「人民の名による」と称しながら人民権力を篡奪する当時の支配政党ボルシェヴィキの代行主義などなど、それは党々国家体制とも国家主義的社会主义とも呼ばれた20世紀社会主義からの脱却、もうひとつのオルタナティブを求めて人びとが闘った課題でもありました。人民の人民自身による人民のための政治、自治や自主管理を軸

に、自由や民主主義に根ざした社会主義、日常生活過程の民主主義を基礎とした政治体制の編成の可能性を追求した人びとの営為をフォローする私の研究は、こんな本との出会いもひとつの契機けいきとしながら始まったのです。

ちなみに、大学院の入試の面接において、私のこの本が課題とした問題への認識の浅さを含め、かつ面接官(恩師の先生方でもありますが)相互の文字通りに激しい論争(面接そっちのけにしての)が展開されたことが懐かしく思い出されます。レーニンやスターリン、マルクスをも含めた人と思いの理解をめぐる問題の複雑さを、この面接を通じて教えられました。試験の出題自体にもびつくりしましたが、同時に、面接を含む試験とは、それ自体重要な教育の一環であることを知らされたひとこまでもありました。

宮本憲一 『社会資本論』

有斐閣

竹内 伝史 [地域科学部]

許し願いたい。

「人生を決めた書物」との企画であるが、最近はやりのこの手の極限型キヤッチコピーを私は好まない。第一、たった一冊の書物で決められるほど安手の人生を私は生きて来たとは思っていない。しかし、このところあちこちで「成熟社会における社会資本整備のあり方」を論じたり、講じたりする機会が多くなるにつけて、40年も前に読んだこの本によって、今日までの私の思考が動機づけられ、整理されているのだ、とつくづく思うのである。その本は、宮本憲一著わすところの「社会資本論」(一九六七年出版)。今でも版を改めて書店に並んでいるか否かは確認していない。またこの文をしたためるに当たって読み直す暇もなかったから、記憶のみで書くことをお

宮本憲一

社会資本論

私は大学受験時には文科系に進むか理科系にするか大変迷っていた。入試の点数は国語や歴史で合格水準を満したのであるが、ともかく街づくりか鉄道の勉強をしたかったことを覚えていた。したがって、行きがかりで入ってしまった工学部の電子工学科から2年生の時に土木工学科に転学科することになった。やはり都市交通の勉強をしたい、というのが名目だが、実は複素関数を使った虚像(なにせ虚数というのだから)の学問に畏れをなしたのだ。しかし、土木工学科も構造力学だの流体力学だの数学を用いた授業のみ多くて、新しい学問分野として期待して跳び込んだ土木計画学の講座には、未だ哲学め

いたものが感じられなかった。鉄道や都市計画が好きだから、そしてそれを学問対象とする講座だから、そこに所属しているだけで、よいものだろうか。

そんな折に出会ったのが、およそ分野の違う学者の著したこの本だった。この本によって、土木工学が建設技術を追究している対象を、社会科学では「社会資本」と呼ぶことを初めて知った。そして、経済の成長と技術の発展によって大規模化したこれら社会資本を、ただ闇雲に造るのではなく、どこに何をいつ建設すべきかを論じる学問として、「土木計画学」というものが出来たことを理解したのである。

著者宮本はこの書の中で、社会資本を社会的一般労働手段（直接に労働過程に入りこまない社会共有の生産手段）と社会的共同消費手段（主として家庭外での人々の

共同の消費活動のための手段）に分別して論じている。

そして、資本主義体制化においては資本の論理に従って、前者の整備が優先され、後者はおざなりにされ庶民は忍耐生活を強いられることになりやすい、と指摘している（これは体制に依らず社会主義体制でも起ることを指摘したのは都留重人の「公害の政治経済学」（一九七二年）であるが）。今、われわれはこの社会資本をインフラストラクチュアと呼び、これを経済（産業）基盤と生活基盤と命名分別して議論している。宮本が論じて40年、25年の土木工学科勤務を経て、文理融合の地域科学部に乗り込んだ私は、改めて本書の先見性・先導性を思いつつ、成熟社会ではいよいよ生活基盤整備への重点移行が急務であると論じている。

宮本憲一（一九三〇～） 経済学者。元滋賀大学学長。公害、環境問題、都市論の研究に従事。他の著書に、『環境経済学』、『維持可能な社会に向かって』、『日本社会の

可能性―維持可能な社会へ―』（いずれも岩波書店）などがあり、これらは現在、入手可能。

宇井純 『公害原論』

富樫 幸一 [地域科学部]

地球環境問題が叫ばれる中で、日本の公害問題の原点を学びたい人に紹介します。われわれの学生時代、公害問題に関心を持っていた人はほとんど読んでいたと思いますし、その当時の雰囲気を少しでも知ってもらえればと思います。

一九七〇年代前半、僕の地元は工場誘致と、公害反対運動の間で揺れ動いてました。高校の先生も関係していた住民運動の側が、宇井さんを招いた講演に聞きに行ったことを覚えています。高度成長育ちで、新産都市のような「開発主義」の洗礼も浴びており、こうした問題を大学に入ったらどこで学べるのかもよく分かりませんでした（今なら地域科学部があります（笑））。公害原論は、



亜紀書房

3990
円(税込)

入学してすぐ入ったサークルのほとんど指定本で、新録で講演を聴いた宮本憲一先生の『地域開発はこれだよいか』(岩波新書)とともに、まさにバイブルでした。

宇井さんたちは東大の都市工学教室で、まだ大学闘争の余韻が残る中、市民を交えた夜の公開自主講座を始めます。今でこそ大学と地域の連携ともいいますが、閉鎖的で、かつ政府や企業側につく学者が多かった中、全国の住民運動との連帯は画期的なことでした。

宇井さんが技術者としての怒りと悔恨を込めて語る熊本と新潟の水俣病の悲劇から、^{さかかみ}遡って日本の近代公害の原点となった足尾鉍毒事件が取り上げられます。同じ頃に、漢文調なので漢和辞典を引き引き読んだ、荒畑寒村

が20歳(!)で一気に書き上げた『谷中村滅亡史』(岩波文庫)も強い印象を受けました。

全国各地の公害や過去の事件がさらに次々と出てくるのですが、岐阜にゆかりのものとしては、大正から昭和初期の荒田川の水質汚濁があります。岐阜市南部の繊維工場からの廃水が、今も県庁の裏を流れる荒田川に流れ込みますが、当時の地元は補償金交渉に走らず、水質改善の一点を掲げて工場に迫った、全国でも先駆的なケースとなります。岐大の図書館には、この資料となった『荒田川閘門普通水利組合史』(古本では結構な値段)が所蔵されています。

個人的にはまさかその後、開発から一転して不況となったコンビニナートのリストラの調査をしたり、その荒田川が流れ込む長良川の河口堰反対運動をするとは思っていませんでした。

宇井さんはその後、沖縄大学に移りますが、地域研究所の初代局長となつて、琉球弧からアジア太平洋地域への地域研究と活性化のための実践の土台を築かれたという点でも、地域科学部にも少しだけ縁があつたのかもかもしれません(新崎盛暉他『地域の自立 シマの力』(上下 コモンズ)。

宇井純(一九三二—二〇〇六) 公害問題の研究者。水俣病の問題を告発し、被害者、住民の立場から、公害の問題を捉える。『公害原論』は、東京大学で夜間、自主

的に開講していた公開講座から生まれ、住民運動に大きな影響を与えた。

高野不当解雇撤回対策会議編

『石流れ木の葉沈む日々』

近藤 真〔地域科学部〕

この本は、表題が示すとおり、「石が流れて、木の葉が沈む」というような不条理が、企業の中ではまかり通っている問題と一人の労働者が13年にわたっていかに闘ったかについて書かれた涙なしには読めないルポルタージュの傑作である。

高野達男さんと言う一人の労働者が三菱樹脂と言う企業に採用された。ところが、三ヶ月後、本採用を拒否される。その理由は、仕事のミスはないが、過去に学生運動に関わっていた経歴が分かったからという理由で、要するに彼の思想が気に入らないと言うのである。仕事の適性とは関係ないではないかという、その理不^{りふ}尽^{じん}に納得できない高野さんと三菱との13年にわたる壮絶な闘いが

労働旬報社



その日から始まるのである。

これが最高裁判例にその名も高き三菱樹脂事件であるが、高野さんは、これは企業による思想良心の自由の侵害だと裁判に訴え、一、二審で勝訴したが、最高裁で逆転敗訴し、高裁への破棄^{はき}差し戻しとなって、高裁で争っていたときに、勝利の和解が成立して、多額の賠償金^{ばいしょう}と、職場復帰が実現するのである。本は和解の日で終わるが、その後の高野さんは立派に勤め上げ副社長まで上り詰めて定年を迎えるのである。

私は、一九七七年、名古屋大学法学部の大学院に進み、憲法学における人権規定の私人間効力の問題について研究を開始した。ドイツ国法学では第三者効力論と呼ばれ

るもので、大企業の中の労働者の思想信条の自由などを争う憲法問題であるが、最高裁のリーディングケースは一九七三年の三菱樹脂事件判決であった。当時、私が参

加していた憲法を守る運動体である愛知憲法会議を通じて名古屋の「職場に自由と民主主義を連絡会」の労働者と交流があり、とくに、中電裁判と関わっていた。当時、関電、中電、東電などの電力労働者は、職場で思想差別を受けていて、人権裁判になっていた。それで、一九一九年のドイツのワイマル憲法が第118条において雇用関係における言論の自由を保障しており、その成立と展開

について憲法制定議会の成立過程、判例実務の積み重ね、解釈学説の論争的展開から、実証的に研究し、日本の議論の参考にしようと考えたのである。

そんなときに三菱樹脂事件を描いた『石流れ木の葉沈む日々』(高野不当解雇撤回対策会議編、労働旬報社、一九七七年)は出版されたが、これは、私の研究分野「社会的権力に対する個人の意見表明の自由」という問題への最も代表的な入門書として必読の書である。私はこのような問題状況を解決するために憲法学の研究を開始したのである。

高野達男

(一九四〇〜二〇〇五) 宮城県生まれ。一九六三年、東北大学法学部卒業、同年、三菱樹脂株式会社に

入社するが、経歴詐称を理由に本採用を拒否される。一九七六年、東京高等裁判所で和解が成立し現職復帰。一

池田香代子再話／チャールズ・ダグラス・ラミス対話

『世界がもし100人の村だったら』

If the world were a village of 100 people

今井篤志【医学部】

書店入り口のベストセラーコーナーに陳列してある書物を手に取るでもなく、表紙を眺めていて目が止まったのがこの書物です。すでにマスメディアで話題になっていたのですが、それ以上に題目の「世界がもし100人の村だったら」と併記してある原題「If the world were a village of 100 people」に興味をそそられました。受験英語で学んだ、現実的にありえない仮定法のbe動詞は「were」であること、および最後の「people」がどうして複数形でないのだろうかという点がこの書物を手に取る引き金となりました。絵本で小冊子であることも購入を後押ししました。

帯紙には「世界を100人に縮めるとまったく違うあなた



マガジンハウス出版

880円（税込）

が見えてくる。あなたも、この村に生きている」とあるように、世界中の人種、就学、識字、犯罪、収入、車やパソコンの所有などを百分率で表しています。日本で生まれ育った自分たちがいかに恵まれているかがよく分かります。裕福な上位にランクされていることに驚きます。言い換えると、日本人の多くが毎日いかに無駄を繰り返しているか、無為に過ごしているかが解ります。この書物を通して、毎日をもっと真摯しんしんに生きていくことが、恵まれない人たちへの還元であろうとも反省させられます。そもそも、この書物の内容はアメリカのある中学校の教師が、毎日学級通信という形で生徒に流したのをまとめたものです。日本よりもいろいろな分野での格差が

大きいアメリカでは毎日のメールによって子供達が違った視点で自分たちの状況を理解し、世界的な視野で他人を思いやる機会を持ったことは明らかです。このような教師に感化を受けた子供達がどのように成長したかは容易に想像できません。

人口を様々な視点からの百分率にし直すというしくみは単純な手法で、まったく違う世界が広がることに驚きました。大学人として、教育者として、研究者として日常業務に携わる者に違った視点から物事を見直す大切さを教えてくれました。しかも、書物には原文と和訳が併記

してあります。二、三の短い文章の簡単な表現が、受験英語から長期間遠ざかった者には新鮮な感動もありませう。例えば、「すべてのエネルギーのうち20人が80%を使い、80人が20%を分けあっています。Of the energy of this village, 20 people consume 80%, and 80 people share the remaining 20%」です。この書物を讀んだ経験がある方も、ない方も、和英両文章を一文一文じっくり味わっていただいたいと思います。あらためて何らかの気持ちに衝き動かされること間違いありません。

チャールズ・ダグラス・ラミス（一九三六～） サンフランシスコ生まれの政治学者。他の著書に、『反戦平和の手帖 あなたにしか出来ない新しいこと』（集英社新書）、『経済成長がなければ私たちは豊かになれないのか』（平凡社ライブラリー）など。

池田香代子（一九四八～） ドイツ文学、児童文学者、

翻訳家。『世界がもし100人の村だったら』は二〇〇一年の出版。その後、続編として二〇〇二年に『世界がもし100人の村だったら2』、二〇〇四年に『世界がもし100人の村だったら3（たべもの編）』、二〇〇六年に『世界がもし100人の村だったら4（子ども編）』が、いずれもマガジンハウス出版から出ている。

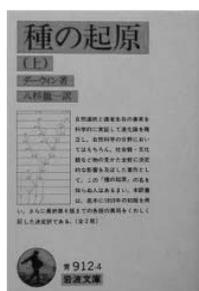
チャールズ・ダーウィン

『種の起源』（上・下 八杉龍一訳）

土田 浩治（応用生物科学部）

人生を決めたという程ではないのですが、学生時代にとっても印象深かった書物の一つとして、ダーウィンの「種の起源」を上げることができます。この本は、大学入学時に購入した本です。当時私は、高校の生物学に飽き飽きしていて、何かスケールの大きな生物学を大学ではやりたいな、という希望を持ち、生態学という学問に魅力を感じていました。それで、入学したての私は、早速「種の起源」を購入しました。しかし、それは比較的平易な訳である八杉龍一版ではなく、堀伸夫版でした。その理由は、単に後者の方がしっかりしていて頑丈そうであっただけのことであつたのですが、訳は古文調で分かりにくく、少し読んで、そのままにしておいたように思いま

す。この本はそのまま私の下宿でしばらく開かれることはありませんでした。その間、私は頭を使わない、もっぱら筋肉系の学生だつたと思います。次にその本が開かれたのは、大学院修士課程の1年生の頃だつたと思います。当時は、それまでの生態学の中に、動物の行動の進化を扱う行動生態学という分野が興隆し、若手の生態学を目指す学生は、こぞって行動生態学に飛びついていた時代でした。これは、決して学会レベルだけのことでなく、その頃からテレビの民放番組で動物の行動を扱うクイズ番組の放映が始まったように記憶しています。私は昆虫生態学を専攻し、子供を残さない働きバチの進化という問題について取り組み始めていました。働き蜂の、



岩波文庫 上下各903円（税込）

「他人のために働く」という形質は、働き蜂が子供を残さないで、それが親から子に受け継がれるという説明が通常の自然選択説では不可能です。それに対して、ハミルトンという学者は、自分の子供を残さなくても、自分の兄弟・姉妹が子供を残してくれば、その甥・姪とは遺伝子を共有しているの、直系ではなく傍系を通して自身の遺伝子を残すことになり、自然選択と矛盾しない、という明快な回答を与えた時代でした。その頃の私が所属していた研究室も、行動生態学真つ盛りの状態であり、日本の大学の中では、この分野でかなり尖った研究室でしたので、ゼミでは「精子競争」、「性選択」、「子殺し」などなど、知らない人が聞くとかなりショッキングな言葉が真面目に飛びかかっていましたし、実際に他の研究室からは、研究室の全員が変人扱いされていました。

チャールズ・ダーウィン（一八〇九—一八八二）イギリスの自然科学者。一八三一年から5年間、イギリス海軍の測量船ビーグル号に乗り、ガラパゴス諸島などを航海、自然淘汰による進化論を導き出す。晩年の一八八一

その当時、私はダーウィンも自然選択説を提唱する過程で、不妊のワーカーの存在が、彼の説に対する最大の障害であることを認識していたことを指導教官の書物から知り、それなら、もう一度ちゃんと読んでみようと思い、下宿でホコリを被っていた「種の起源」を改めて開いたわけです。凄（す）い衝撃でした。彼は極めて慎重に回りくどく、ネチネチと自然選択説を展開します。不妊のワーカーの問題も、性選択の話も少しだけですが出てきます。読後の感想は、まさに一九八〇年代の学生がとり組んでいた行動生態学的主要なテーマは、全てダーウィンの手のひらの上にあつた、というものでした。彼は100年以上も前に、そんな問題を一人で説明しようとしていたわけです。今も、私はダーウィンの手のひらの上で遊んでいるような気がします。

年には、40年にわたる観察結果にもとづいた『ミミズと土』（平凡社）を出版。他の著書に、『ビーグル号航海記』（岩波文庫）などがある。

A・C・ブラックマン 『ダーウィンに消された男』

小見山章〔応用生物科学部〕

なぜ、西洋の古典音楽や本に、私は感動できるのだろうか？これは、高校生の頃から不思議に思っていた疑問です。単なる共感とか連想ではなく、魂に触れる稀な感動まれ経験を、皆さんもお待ちでしょう。本は、知識を与えることはできません。しかし、知恵は伝えられないはずでもし伝えられるのなら、たとえば経本を読めば、私は聖人になれるはずですから。深い感動は、本それ自身にあるのではなく、それを感じる者の知恵にあると思います。知恵は経験で形成されます。だとすると、感動した本の内容を、自分はすでに経験していたのでしょうか？未生以前の記憶であるのでしょうか？わからなくなってきました。自分の頭の中って、奇妙ですね。いつも、私の

考えはこれ以上に進みません。

「ダーウィンに消された男」の原題は、“A Delicate Arrangement”です。訳者は、推理小説のような題名をこの本に与えました。しかし、その内容は、生物の進化について、ダーウィンと同時代に、この本の主人公であるウォレスが、熱帯の冒険を通じてどのように体得したかが書かれています。この本の主題は、むしろ、ダーウィンとウォレスの先取権争いにあるのかもしれない。しかし、私がこの本に感じ入ったのは、ウォレス自身の名著「マレイ諸島」も含めて、熱帯学徒としてみせた彼の行動です。一五〇年も前、ろくに満足な船もなかった時代に、いったい、彼は、「緑の地獄（第Ⅱ章）」



朝日選書

1785
円（税込）

の中を、なぜ旅することができたのか？これが、この本で、私の感動を目覚めさせる発端となる疑問でした。

この本を書店で発見したのは、ちょうど、私が熱帯のマングローブ研究に夢中になっていた頃のことです。当時、私は30代の若い助手として、初めての海外遠征に参加しました。しかも、マングローブ林の根のバイオマスを計測するという重いミッションを持って、マレイ半島にあるラノンという田舎町に数ヶ月滞在しました。営林署の小屋には、水道もなく、飲み水は天水を使っています。蚊や慢性的な下痢と歯痛と皮膚炎に悩まされながら、毎日、現地の人と一緒に、泥の中にある巨木の根と格闘する日々が続きました。仕事を通じて現地の友人ができ、森の暮らしをだんだん楽しむようになりました。そのうち、私の研究場所が、東インドネシアに移りました。今はウォーレスの時代と違って、飛行機もあればト

ラックもあり、夜に電灯のつく粗末な宿（プギナパン）に泊まることも出来ます。しかし、ここは、一五〇年たっても、まさにウォーレスの書いた世界そのものでした。

「緑の地獄」は部分的にまだ存在しました。調査地のハルマヘラ（ジャイロロ）島に行くには、テルナテという島を経由します。ここは、ウォーレスが自分の考えを試論にまとめ、それをイギリスのダーウィンに送った、まさにその場所です。

なぜ旅することができたのか？その理由は、ウォーレスがマレイ諸島の風土にそのまま同化することができた、すなわち、熱帯林で繰り広げられる人々の暮らしを享受できたからだだと思います。実は、人は、森林そのものを愛するのではなく、暮らしを通して森林を愛するのだと思います。その部分に私は感応しました。

ジャン・アンリ・ファーブル

『完訳 ファーブル昆虫記』

(全10巻) 山田吉彦・林達夫訳

二上英樹〔生命科学総合研究支援センター〕

今、自宅の本棚には大人買いした岩波文庫の完訳ファーブル昆虫記が10巻収まっているのだが、実を言うと、初めてファーブル昆虫記を読んだのがいつだったのかは、よく覚えていない。小さいころ、小学校の図書館にあった書物を借りて片っ端から読んだ記憶だけが残っている。

ファーブル昆虫記は、ご存じのように1冊ではなく、シリーズ物だ。有名なフンコロガシの話や、アナバチの話に始まり、サソリやコガネムシの話まで、いろんな虫たちの話が続く。幼少時、幸せなことに田舎に住んでいた私は、野山を駆け回るのが好きで、虫取りや魚釣りなどして遊んだ。ところがファーブル昆虫記に出てくる虫



岩波文庫

798
〜
903 円 (税込)

たちは、結構マイナー（少なくとも子供たちに人気のあるカブトムシやきれいなチョウチョではない）な上に、そんじょそこらにいないような虫ばかり出てくる。図鑑でしか見たことのない虫たちの、その生活を生き生きと書かれたこの本を、わくわくしながら読んだものだ。

今回、私は『人生を決めた書物』のアンケートに、ファーブル昆虫記をあげたわけであるが、正直に言うとこの本だけを読んでその後の人生を決める転機となったわけではない。また、この本の中に出てくるとある文章や、虫たちの生き方に猛烈に感動したわけでもない。ただ、ファーブルや（動物記で有名な）シートンのように、好きな物（自分が興味を抱く物）を日々、観察して暮ら

せるような人生はなんて幸せだろうかと、小さいながらに漠然とした思いを抱いていたことは事実である。

自分の場合は、《この本を読む↓人生を決める↓現在の自分》ではなく、《もともと理科（とくに生物）が好き↓この本を読んでもっと好き↓現在の自分》というのだったのだと思う。そんなわけで、小学生のころにはすでに将来は生物学者や自然科学の研究者になりたいと心に思っていた。現在では、幸せなことに、その通り生命科学の研究者になっているわけである。このファール昆虫記は、研究者になって読み返してみると、小さいころ感じたことと、また違った感想を抱く。読み物の形態をとっているため、日頃読む論文などは趣が異なるが、まだDNAや二重らせんなどが全く知られていない

10年前、綿密な観察だけでこれだけの物を書き上げたというのは、すばらしいとしか言いようがない。自然科学の基本は、「観察」であると再認識させられる。

最近、本離れが言われているが、本好きの私からするともったいない話である。陳腐な本も確かにあまたあるが、とある人が一生かけて得た経験や生き方が一冊に凝縮されているような本もたくさんある。本を読むというのは、その著者の人生を読むに等しく、その人が数十年必要としたことを、わずか一冊で経験することができるといえる。若い人には、若いうちに、数多くの本を読むことにより、いろいろな人の人生に触れて、その後の生き方に生かしていったら欲しいと、とみに思う。

ジャン＝アンリ・ファールブル（一八二三～一九一五）
フランスの生物学者。コルシカ島、アヴィニオン、セリニアンで昆虫の行動を観察し、『昆虫記』としてまとめる。

『昆虫記』は、大杉栄をはじめ、林達夫、山田吉彦、近年では、奥本大三郎など、さまざまな翻訳が試みられてきた。

コンラート・ローレンツ 『ソロモンの指輪』(日高敏隆訳)

森脇 久隆〔医学部〕

コンラート・ローレンツ著「ソロモンの指輪」、人生を決めたというより、私にとって生涯の愛読書である。生命科学を志す人々に限らず科学 science(サイエンス)の楽しさを教えてくれる書物として、ぜひ皆さんにお奨めしたい。

ご存知のとおり科学は人文、社会、自然を問わず、現代では細分化する一方である。しかし自然科学では、古来「博物学」という言葉があるとおりに、領域を横断して取り扱うアプローチが正統であったと私は思う。物語の上では『ドリトル先生』が代表であり、歴史上の人物ではレオナルド・ダ・ビンチ、南方熊楠みなみかた くまのすけが当たろう。彼ら



ハヤカワ文庫

735円(税込)

に比べれば、もちろんコンラート・ローレンツは二十世紀の人であり、カバーする科学の領域が若干狭くなるのは致し方ない。しかしそのような時代の制約を超えて、生命科学を切り口として博物学の楽しさを教えてくれる書物がこの「ソロモンの指輪」である。

コンラート・ローレンツはドイツのマックス・プランク研究所に所属し、ノーベル賞を受賞した有名な学者である。小さいころから生物に親しみ、その生態学を生涯の研究テーマとして世界の頂点に至ることができた、あの意味で幸福な科学者ではある。しかしこの書物を読むと生き物に対する心からの愛情を感じ取れ、ローレンツ

が地球上に存在しその書物を読むことができた私どもの
幸せを感謝せずにはいられない。この本が優れているの
は、どの章からでも読み始めることができる点にもある。
なかでも私はテラリウム、ガチョウの親（刷り込み）と
いった章をお奨めする。たとえばテラリウムは、ガラス
の水槽に水を7/8分目いれ、金魚、水草を加え、上部
は普通の空気、ガラスのふたで密閉、日の当たる室外に
置くと、以後何も介入せずとも自己循環の世界、すなわ
ち地球が出来上がるというわくわくするような話であ
る。

ここまでお読みいただくと、お気持ち頂けるかもしれ
ないが、私自身も動物が大好きである。最近の話をす
ると（6月の執筆です）、生まれたばかりの子スズメがベ
ランダの隙間にはまり込み、両親は手摺にとまって大騒
ぎするは、飼い猫は窓の手前からうなるはの中、いかに

コンラート・ローレンツ（一九〇三—一九八九） オー
ストリアの動物行動学者。ハイイログンの観察から「刷
り込み」現象を発見。一九七三年、ノーベル医学生理

自然に子スズメ逃げられるよう仕向けるか、また柄の
入ったアゲハチョウの芋虫（成虫になってからではなく
芋虫のときから柄があるのです）を、自然の状態のまま、
如何に鳥たちから守るか、生き物好きの毎日は大変なの
である。さらに岐阜大学の諸君、岐阜大学を志願する諸
君にも、岐阜大の自然環境がどれだけ凄いかをぜひお知
らせしておきたい。キャンパスに飛来する渡り鳥の種類、
とくによく太って飛びたてるのかどうか不安なほどの
鴨、嫌われ者かもしれないが外来種の大ねずみ「ヌート
リア」が中央の池を悠然と泳ぐ姿、それを取り囲んでガ
ーと叫ぶ鴨、動物好きにとってお昼の散歩が楽しみで
ならないキャンパスは全国的にも珍しいものであるう。
最後はいささか脱線してしまっただが、ぜひ読んでみて
ほしい本の強引な宣伝に免じてお許しいただきたい。

学賞を受賞。他の著書に、『攻撃 悪の自然誌』（みすず
書房）、『動物行動学』（ちくま学芸文庫）などがある。

ジェームス・D・ワトソン 『二重らせん』

松永洋介〔教育学部〕

DNAという言葉は今日では誰もが知っている言葉となった。高校の生物でも習った人は多いだろう。そして、このDNAが二重らせん構造をしていることも多くの人は知っているだろう。しかしこのことを解明したのがジェームス・ワトソンとフランシス・クリックの二人であるということはどのくらいの人を知っているだろうか。

彼らはこの業績に対してノーベル生理学医学賞を受賞した。そのときこの本の著者ワトソンは34歳であった。しかし、実際に彼がこの研究をしたのは25歳だったのである。

この本には、若き日のワトソンがクリックとともに



講談社文庫

467円（税別）

DNAの構造解析をすすめ、二重らせん構造モデルを作るまでの日々が著者自身の言葉で綴られている。

内容は私にとってはとても面白いもので、一気に読めた。当時DNAの構造を解析していたのは彼らだけではなく、世界中の学者が取り組んでいた。その熾烈な競争の中でライバルにアイデアを気づかれないためにカムフラージュをしたり、先陣争いをしたりする様子が書かれていて、ちょっとしたサスペンス小説のような感じだった。

私がこの本を読んだのは学部4年の時であった。当時私は生物学を専攻し、ミトコンドリア遺伝子の伝達様式について卒論を書いていた。そのこともこの本に没頭で

きた理由だろう。しかしそれだけではなく、研究室の雰

囲気が勉強する雰囲気であったことも否めない。文化系の人には少し想像しにくいかもしれないが、理科系では授業のない日でも毎日研究室に通い詰めて研究する（もちろん夏休みも）。研究室には指導教官や先輩院生がいて、お茶の時間になるとおしゃべりをする。話の内容は

研究のことばかりではなかったが、ひとたび研究の話になると、世界の代表的な科学者の名前がポンポン出てきて、本や論文を読んで勉強しなければいけないという気がした。それで本屋へ行ってはいろいろな本を探し、面白そうなものを買ってきた。この本もたぶん先輩から聞いて本屋で見つけて買ったのではないかと思う（そういえば当時のT先輩の口癖は「勉強せえよ」だった）。

普通、論文を書くとき、その研究テーマは大変限定された狭いものとなる。しかし研究するには、自分の研究テーマだけでなく、その周辺のこと幅広く勉強しておくことが大切であることを知ったのもこうした研究室の空気のおかげだと思う。

「人生を決めた書物」というテーマにしては、この本の内容は今の研究とはかけ離れている。しかし研究する人生を選んだのは、大学時代のあの研究室の雰囲気であり、そこで知ることのできたいろいろな本の影響であると思う。そして、その中から一冊をあげよと言われればまずこの本を推したい。

ジェームス・D・ワトソン（一九二八〜） アメリカ

の分子生物学者で、一九五三年、F・クリックとともに、デオキシリボ核酸が二重らせんの構造をもつことを究

明、一九六二年にノーベル医学・生理学を受賞。他の著

書に、『DNA』（上・下 ブルーバックス）、『遺伝子の分子生物学』、『細胞の分子生物学』などがある。

川喜田愛郎^{よしお}

『生物と無生物の間ーウイルスの話』

福士 秀人〔応用生物科学部〕

わたしはウイルスを研究しています。この本で取り上げられている「ウイルス」に惹かれ、今日まで30年近く研究を続けています。

この本を手に入れたのは大学1年生か2年生のころだと思います。川喜田先生の本とはパスツールについて書かれた同じく岩波新書で出会い、この本が書かれていることを知り、買ったように思います。実は、この本が出版されたのは、わたしが買ったときよりも20年以上前、今からでは50年以上前です。自然科学系の書物の多くは、時代とともに内容が古くなり、見向きもされなくなります。特に、この本は医学系の話が主題であることを思うと、20年であっても十分、淘汰^{たうた}されるべき年数です（DNAの2重螺旋^{じゅうじゅう}の報告からほぼ3年の出版ですが、本文中にはそのことは何もでてきません。これはとても大事な意味をもっているのですが、今回の主題ではあり



岩波新書

777円（税込）

ません）。にも関わらず、わたしは出版から20年以上を経て、この本に出会い、そして今日でも講義で学生たちに紹介し、自らも時折、ページをくくっているのはなぜなのでしょうか。

今回、久しぶりに全文を通読しました。驚いたのは、ここで紹介されている黄熱という病気の研究の進展とわたしが現在、主なテーマとしているウイルスの研究がよく一致することです。これまで、研究をしているときにこの本を読み返すことはありませんでした。しかし、専門に入る前に読み、いつも手元においておいた本がなげなく導いていたのかもしれない。実際には科学的なものを見方をすれば必ずから同じような進展をたどるのはいうまでもないことですから、直接の関連がないのかもしれないかもしれません。ただ、この本で紹介されている題材は50年以上の年月を経て、現在、なお通用する内容をもつ

ているという言い方もできます。自然科学系の書物の多くが10年をまたずに消えていく一方で、この本が今も存在価値を見いだされる所以でしょう。

最近、ほぼ同じタイトルで「間」が「あいだ」となっているだけの本がベストセラーになっています。わたしもその話は雑誌に掲載されていた頃から読んでおりました。しかし、「間」と「あいだ」の間には大きな違い（溝）といつてもいいかもしれません）があり、最近のその本が10年以上をへて自然科学の領域で存在価値をもつとは思えません。それは、おそらく自然をみる視点の確かさなのではないでしょうか。わたしがこの「生物と無生物の間」で期待したのは、副題にもあるように「ウイルスとは何か」を知ることでした。しかし、その命題はなおも回答を待ち続けています。わたし自身、ウイルスを扱い、研究を進めてきましたが、その姿を肉眼でみることはできなくても、ウイルスには生命のなにがしかを感じざるを得ません。最近の本ではウイルスは生命ではないとされていますが、わたし自身の考えとは相容れないものです。川喜田先生の本で示されているウイルスの姿の方がわたしの考えに近いのは、わたし自身がこの本の影響を受けてきたということなのかもしれません。

この本は新書なので、それほど厚くはないのですが、小さい活字で図もほとんどなく、淡々と書かれています。いわゆる読みやすく、噛み砕かれたものではありません。にもかかわらず、非常に読みやすく、川喜田先生がそばで話されているような感覚をもつのは不思議なことです。

この本の主題となっているウイルスは生物なのか無生物なのかについて、現在、ウイルス学者の間でも見解はわかれています。それぞれに科学的な根拠があり、また、興味深いことに、それぞれが自分自身の見解を懐疑的にもみています。ウイルスという一見、小さな存在が生物とは何かを問いかけて続けているからです。この本が50年を経て、いまだにその存在価値を失わないのは、このようなより根本的な命題をより具体的な題材で丁寧（ていねい）に説明しながらも著者の哲学（とわたしは感じるのです）が行間からにじみ出ているところにあるのでしょう。日頃、些細な論文掲載の採択、不採択に一喜一憂（いっきいちゆう）しがちですが、より根源的な問いに答えられるような研究成果を残すことが大事だと、この本は教えてくれます。それだけでも、この小さな本がわたしの人生に与えた影響の大きさを今更ながらに感じます。

和^ニ秀雄 『ニホンザル性の生理』

鈴木 正嗣 [応用生物科学部]

本書に出会ったのは大学2〜3年生の頃と記憶している。当時、私は帯広畜産大学獣医学科の学生として、サークル活動を通じ、ゼニガタアザラシの調査に従事していた。そして、自分が学ぶ「獣医学」と個人的に興味の尽きない「動物生態学」との関連性を考えあぐねていた。少なくとも当時の獣医学では「野生動物は趣味(お遊び)」と認識され、教員からもそんな見解をしばしば聞かされていたためである。そのような時代背景(?)の中、本書の冒頭、「はじめに」の記述は衝撃的であった。

そこには、「サル」の生態学や社会学の研究者の著作の中に、皮膚の内側の生理的・病理的な現象についての認識が不足したり、かたよったりしているために、そこか



どうぶつ社

1890
円(税込)

ら引き出された結論に、重大な点での誤りがいくつか含まれている場合もある」と記され、「皮膚の内側の現象は、皮膚の外側から見える現象の基盤である。もう少し、サルたちの内側のことについての知識が、一般にも、そして研究者のあいだにも、広められていいのではないだろうか」と続けられていた。これは獣医師として先駆的にニホンザル研究に取り組まれた和先生ならではの視点であり、「獣医学は野生動物研究にどう関わるべきか」という私の問題意識に対する重要なヒントと道筋を示していた。

折しも、ゼニガタアザラシの調査では、サケ定置網内で溺死した個体を活用するプロジェクトが始まっていた。

幸い私は修士論文（獣医の学部教育はまだ4年制であった）のテーマとしてその生殖器を扱うことになり、本種の性成熟年齢や妊娠率、発育過程等の解明に関わることができた。この時に得られた所見は、和先生が指摘する「皮膚の内側の現象」の「ゼニガタアザラシ版」であったと今でも自負している。一方、和先生は日本モンキーセンターから日本獣医畜産大学（当時）に移り、新設の「野生動物学教室」を担当されることになった。ちょうど修士課程修了が迫っていた時期でもあり、私はそのタイミングの良さに感謝しつつ、和先生の研究室に博士課程の大学院生として「弟子入り」したのである。

野生動物学教室では、エゾシカの繁殖と成長に関する研究を開始した。現在のエゾシカ個体群は「爆発的な増加と分布拡大」を呈し大きな社会問題となっているが、当時の生態学的諸研究はまさに現状を「予言」するものであった。私を得たデータ（満1歳での性成熟と毎年ほぼ100%に達する高い妊娠率）も、繁殖学的観点からこれ

を裏付けていた。また、多くの生態学研究者との協働を進めるうち、前掲の和先生の指摘と表裏を一体にする「誤り」の可能性にも気付くことになる。すなわち「皮膚の内側に関わる研究者が犯す可能性がある、皮膚の外側の現象に対する認識不足に起因する誤り」についてである。実際にこの種の誤りは、今でも野生動物を対象とする獣医学や医学の研究に散見される。

現在、私は「皮膚の内側の現象」は「体内事象」、「皮膚の外側の現象」は「体外事象」と言い換え、研究の場では両者のバランスに最大限の注意を払っている。また、野生動物医学教育の場では、「体外事象の解明に関わる生態学研究者との協働（コラボレーション）の重要性」を強調し、「体内事象に過度に偏る解釈や技術の行使」を強く戒めるようにしている。この基本姿勢は私の教育研究上の特徴と言えるものであり、その元をたどれば、本書「ニホンザル性の生理」に行きつくのである。

和秀雄（一九三九〜） 鹿児島県奄美大島生まれ。北

海道大学獣医学部卒業。日本モンキーセンター研究員、

日本獣医畜産大学教授、大阪大学大学院教授などを歴任。

『ゴンはオスでノンはメス』（どうぶつ社）で、第39回毎日出版文化賞を受賞。

ステイーヴン・J・ゴールド

『ワンダフルライフ』（渡辺政隆訳）

國貞隆弘〔医学部〕

今までに私が見たことも聞いたことも考えたこともない切り口で生物進化を語ったエッセイ集「パンダの親指」を博士号取得後の何かと自分の研究だけに忙しい頃に読んだ。著者のステイーヴン・J・ゴールドは日常的な語彙を使いながら限りなく学問的に厳密に論理を組み立て、最後には読者の視点を180度転換させることができる、私を知る限り最高の教養と表現技術を持つ人である。まあ、そのときから私はゴールド教の信者になってしまい、彼の邦訳されたほぼ全出版物を最低3回程度は読み、ドーキンスなどゴールドの見解を毛嫌いする（意見を異にするというような生やさしいものではない）学者の論説（著書の中の一節）をあつかましくもゴールドに成り代わって攻撃しつつ読み、著書のテーマを講義に援用し、入試を含む様々な問題のテキストとして利用し、あらゆる問題をゴールドの解釈によるダーウィン進化論で一度



ハヤカワ文庫

987円（税込）

は理解しようとして試みた。

ゴールドのエッセイには、芸術や科学あるいは教養というものに関して一言あると自負している人が生まれ、この方考えてもこなかったものの見方が、公正な典拠付きで披露されている。例えば、進化生物学は実験的に検証できない「歴史」を必要とする曖昧な学問であるとの指摘に対しての彼の反論はこうである。「木星の惑星イオは地球以外唯一の火山活動のある太陽系の天体であるというボイジャー一号の発見は私を喜ばせた。通常このサイズの小さな天体は物理法則に従って月のように形成後早期に地殻の活動が停止してしまうが、イオはたまたま歴史的な偶然により木星という巨大惑星の衛星であったため、その巨大な潮汐力による地殻の摩擦熱が火山活動を継続させた。歴史を無視した自然科学は、計算の容易な岩石の塊である小さな天体についての真実を知

ることさえ危うくする・・・。」およそこういう話がど
のエッセイにもちりばめられているので、私は著書が翻
訳されるたびに購入せざるを得ず、もどかしいときは原
著を買って求めた。そのグールドの傑作エッセイが今回紹
介するワンダフルライフで、この書物で初めて一般向け
に詳しく紹介されたアノマロカリスなどのカンブリア中
期の奇妙奇天烈動物がテレビなどに頻繁に登場するよう
になった。本書の主張の学問的正しさについては専門家
からの根拠ある反論も出てきており、今後修正される可
能性はあるが、本書の主眼である進化生物学の際だった
面白さ、自然と人間を理解するための筋道だった考え方
の重要性は不変である。

グールドは26歳でハーバード大学助教、32歳に同教
授になり、多数の進化論に関する専門論文と専門書と
エッセイ集を出版し、人種偏見を正当化する主張を容赦
なく論難し、生物の創造論者との裁判に勝利をおさめ、
様々な学術賞を受け、アメリカ科学振興協会（A A A S
Ⅱ 科学雑誌サイエンスの版元）の会長などの要職を務め、
中皮腫のため二〇〇二年に惜しくも亡くなった。たしか
に、彼の遺伝子の定義に関する専門的な論文には、遺伝

子の研究が専門の私から見ても、彼の定義による無用の
混乱以上の有用性が見いだせなかった。それゆえ進化学
者、古生物学者のかかりの人がグールドの専門研究とそ
れに基づいた主張に関し同様の混乱を感じていることも
理解できる（ウイキペディアのグールドの項などを参
照）。グールドは、多くの絶賛にもかかわらず、その思
考パターンを一度は身につけた後卒業することが重要で
あるような、そういう種類の学者・思想家であるのかも
しれない。もちろん事実として、彼が提唱した進化に関
する断続平衡説の論文は今でも専門分野の論文に頻繁に
引用されており、科学者としての彼の突出した業績には
何の問題もない。彼の学問は、その人となりとともに容
易にひとつの類型には還元され得ないのである。まずは
騙された^{だま}と思って奇跡的なグールド教授の著書にじつ
くり目を通すことを勧める。個々の科学技術や芸術だけ
でなくそれらを創造する人間に興味がある人、できれば
そのようになりたい人、物事を根源的に考えたい人、人
類の由来と将来を自分なりに納得したい人、つまり多く
の岐大生諸君の必読書が本書以外にそうそう多くあると
は思えない。

S・W・ホーキング

『ホーキング、宇宙を語る』（林一記）

須藤 広志〔工学部〕

シドニーから北西へ100キロほど、見渡す限りのユーカーリの森と広大な溪谷、ブルーマウンテンがある。この地で一週間、「合体するブラックホール」というちよつと変わったタイトルの研究会が開かれている。その時間の合間を縫ってこの原稿を書いている。

何でも吸い込んで、光ですら決して逃げられないというブラックホール同士が、互いに接近したら何が起こるのであるうか。2つのブラックホールは連星のように共通重心の周りを公転運動する。一般相対論の予言では、未だ直接検出できていない強力な「重力波」が放射され、軌道回転エネルギーを失い、数千年のタイムスケールで軌道半径が縮んでいき、ついにはより重いブラックホールに合体するという。この極めて興味深いテーマに私は取り組んでおり、このようなブラックホールを見つけないかと思っている。



ハヤカワ文庫 609円（税込）

私が宇宙に興味を持ったキツカケは小学生の時、両親に買ってもらった「宇宙ポケット大百科」である。土星に輪があることや、新彗星を発見したら発見者の名前が付けられることなど、おもしろくて何回も読んだ。やがて一九八六年のハレー彗星の76年ぶりの大接近もあつたりして、高校生の時には宇宙の謎に挑戦できる仕事に就ければいいな、と漠然と思っていた。

そんなときに出会った本が「ホーキング、宇宙を語る」である。宇宙はどうやって誕生し、どんな終わりを迎えるのか、宇宙論の大命題をわかりやすく解説した大ベストセラー、というふれこみで、大いに期待していた。ところが、途中まで読んで挫折し、また最初から読み直し・・・の繰り返しで、結局半分くらいまでしか読めなかった。正直言って、当時ほとんど内容が理解できなかったのである。

「それで人生を決めた本などと言うのはけしからん」と言われる人もいるだろう。しかし宇宙に興味を持ち始めた私に、2つの意味で大きな影響を与えたことは確かである。一つは「宇宙論は難しい」。ビッグバンや宇宙の果てなど、誰しも興味を持つことだが、本気でやろうとすれば、量子力学や素粒子論などが出てきて簡単には手を出せないのだ。ましてやそれを職業にできる人はホーキング博士のような天才だけだ・・・かくして宇宙論の研究者という道は早々に諦めた。

もう一つ印象に残っているのは、序文に書いてあることだが、この手の本は数式を一つ入れる度に売り上げが半減する、と聞いたホーキング博士が、それでも唯一入れざるを得なかったという $E=mc^2$ の式である（ E はエネルギー、 m は質量、 c は光速）。ホーキング博士をしてそこまでして入れたかった $E=mc^2$ 、いったいどんなものすごい式なんだ？という思いだけが残った。これは、アインシュタインが一九〇五年に発表した特殊相対論から導かれる、質量とエネルギーは等価であることを示す有名な式であり、太陽や恒星のエネルギー源（核融合）、また原子力発電所、原子力爆弾（核分裂）などはこの法則なしには説明できない。特殊相対論は、大学に入ってから少し勉強したのだが、

これも難しくて途中で諦めてしまった。「影響を受けた」と言いながら、実際には諦めた話ばかりでけしからんと、また怒られるかもしれない。「諦める」というのは通常ネガティブに捉えてしまうことが多いが、私にとつてはこの体験は、今の人生を決めている大事な要素である。宇宙論も相対論も自分には向いてないことがわかって初めて、今のようなブラックホールの観測研究を行う道筋ができたと思っている。「何かをやるということは、それ以外の全てをやらないということ」というのは恩師の言葉である。

しかし、人生とは分からないものである。ブラックホールの合体という現象が実は、宇宙論や銀河の創成に大きく影響している可能性があり、また、相対論の知識が不可欠なのである。そのために相対論を一から勉強し直し、今では大学院の講義で教えている。

さて、ブルーマウンテンでの研究会、どんな最新の成果が出てくるだろうか。楽しみである一方、それらは研究上のライバルであり、うかうかしてもいられない。相変わらず英語は下手だが、それでも何とか外国勢に食らいついていこうと思っている。そして、空き時間には「ホーキング、宇宙を語る」、残りの半分を読破しようと考えている。

レイチェル・カーソン 『沈黙の春』を読んだころ

高見澤一裕（応用生物科学部）

もうずいぶん以前になってしまったが、40年前に大学生になったときのことを昨日のことに強烈に覚えている。これで、自由になった、自由に好きなことに没頭できるという開放感が第一であった。それだけ、受験という重圧、課された課題を解かねばならないという圧迫感、が苦痛であった。解放されたときにいくつかの誓いを自分自身にたてた。その一つは、大学生活の4年間で1000冊の本を読むことであった。なぜ1000冊か、その理由はよく覚えていないけど、当時、岩波新書は朝日ジャーナルと共に大学生の必読書で、岩波新書の編集方針は、大学生が2〜3時間で読了できる内容と量であると言われていた。したがって、1日1冊の新書



新潮文庫

629円（税別）

を読むとして1年間で365冊、4年間では1460冊となり、余裕を見れば4年間で1000冊は読了できることになる。これだけ読めばとりあえずは国際的にも恥ずかしくないだけの教養が身につけられるものと考えた。

入学前から、早速実行することにした。最初にどの本を読むか、これは大きな命題であった。円滑な学生生活のスタートを切りたい、高望みもしたい、けど、挫折はしたくない。あまり幼稚あるいは大衆的なものはいかかなものか、等、色々考え、相談もした。私は何となく夏目漱石からと考えていた。父にも相談した、「学生に与う」（河合栄次郎）や「純粹理性批判」（カント）が出てきた。

やはり、旧制の人であった。それなら、「反デューリング論」（エンゲルス）をよむことが時代に合うと考えた。

あれこれ思案していたが、ともかく、漱石から始まった。はじめはともかく楽しかった。どの本でも新鮮でわくわくして1日に2冊3冊と読んでしまった。しばらくすると、毎日読むことを自分に課したことが義務感と なってしんどくなってきた。そして、読まなくなつた。

昭和45年の6月のことである。札幌市のなにわ書房になにげなく入って手にした本があつた。「生と死の妙薬」であつた。パラパラと立ち読みしながら受けた衝撃の強

さは昨日のことに思い出される。農薬使用への警鐘が主たる内容である。数々の例を取り上げながら一つ問題点を掘り起こしてゆく方法の論理性、巧みさに驚愕した。きょうごがくそして、根底にある筆者の人類愛、人間愛に感動した。この本は、その後、「沈黙の春」と改題され20世紀のベストセラーとなっている。この感動を契機として再び新書の読了の旅に復帰した。そして、結局、3年生の終了時点で1000冊を読破した。以降、この習慣は未だに続いており、果てさて、何冊読んだやら。

レイチェル・カーソン（一九〇七—一九六四）アメリカの海洋生物学者、生物ジャーナリスト。一九六二年に『沈黙の春』を出版し、化学薬品の危険性を告発、自然

破壊、環境問題に目を向ける大きなきっかけとなった。他の著書に、『われらをめぐる海』（ハヤカワ文庫）、『セス・オブ・ワンダー』（新潮社）などがある。

エルヴィン・シュレーディンガー

『生命とは何か―物理的に見た生細胞』

吉田 敏〔工学部〕

この本についての読書体験を記せ、という教養教育推進センターから指示があつてから、さてこの本をどこにおいたか、と自宅の蔵書を探したが見つからない。さては大学を卒業する時に古本屋に売つたか、誰かにあげたか、ともかく現在には直ぐには読み返すことはできない。しかし、相当なインパクトを受けた、という記憶は鮮明にある。大学入学時、一九六九年というのはいわゆる大学紛争（学生は闘争と称していた）華やかかなりし頃で、僕の入学した京大理学部も半年間は授業がなかった。その間、別に遊んでいたわけではなく、クラスの同好の士が集まっているんな本を読みあつたり徹夜で酒の力を借りて議論を続けた「自主ゼミ」なるものを、下宿先や喫



岩波文庫

630円（税込）

茶店や、時には学部の物理教室の部屋を借りたりして、行つていたのである。その「生命とは何か」をどこで、いつ、討論しながら読んだのか、自分だけで読んだのかは、記憶は定かではないが、入学時はいわゆる「湯川効果」によって物理をやつて素粒子や宇宙のことを知りたいと思つていたものが、生命を、人間を、根本から知りたい、と方向を大転換させたのだから、大きなインパクトだったのだろう、と思う。

この本は、一九四四年に刊行され、日本では一九五一年に岩波から翻訳本（岡小天・鎮目恭夫訳 新書版）が発刊された。僕が生まれた年に日本で刊行されたわけでもう57年になる。あのワトソンやクリックもこのシュ

レーディングラーの本にかなり影響され、DNA二重螺旋の発見に繋がったとされている。僕にとって、人生の進路を決めることになった書物は、実はこの本だけではなく、他に「物質・生命・宇宙へ1、2」（小谷正雄編 共立出版 一九六九年）も挙げる事ができる。これは、僕が京大物理から阪大基礎工学研究科生物工学専攻に進学するとき、小谷正雄先生（一九六〇年にできた日本生物物理学会の初代会長）の居られた（その時は既に退官されていたが）研究室に入ることになるきっかけを作った、という本であり、自然の階層性という考え方を与えてくれた。

エルヴィン・シュレーディングラーは、量子力学の発展に重要な役割を果たした大物理学者であるが、「生命と

は何か」を出版したときは57歳であった。一九三三年にディラックとともにノーベル物理学賞を受賞してから11年後のことである。この偉大な物理学者が書いた「生命」についてのこの本の意義は、生命を「物理理論」で解明できるだろう、という確信のようなもの、あるいは指針を与えたところにあると思っている。彼は、そこで非周期結晶（DNAなど生体高分子のこと）と遺伝情報の貯蔵との関係を示しただけでなく、生命という熱力学的開放系で自己調節と自己発生過程が発現するという概念、すなわち、今日の生体構造形成の原理の研究に繋がる発想も提示していたのである。僕も57歳になった今、もう一度シュレーディングラーの思考履歴をたどってみたい気がする。

エルヴィン・シュレーディングラー（一八八七—一九六一）オーストリアの理論物理学者。「波動力学」を打ち立て、一九三三年にノーベル物理学賞を受賞。一九四四年に

出版された『生命とは何か』は、分子生物学への道を切り開くことになる。他の著書に、『わが世界観』（ちくま学芸文庫）などがある。

ジョン・C・ケンドルー

『生命の糸』（和田昭允・鈴木由希子訳）

丸山 清史〔工学部〕

今から41年前、私が大学2年生のとき、同じクラスの女子学生達が教科書らしくない、しやれた装丁の本を机上に置いていました。それがケンドルーの「生命の糸―分子生物学への招待」で、先生を交えた自主ゼミのテキストに使っているとのことでした。その本の巻末写真にこれまで見たこともない何とも奇妙なロボットのような姿が写っていました。この不可解なものゝの正体を知りたくて早速本を購入し、読みましたところ、大腸菌に感染するウイルス（バクテリオファージ）の電子顕微鏡写真だったのです。DNAの入った大きな頭、鞘のある胴、針のついた尻、足もあります。まさしくミクロのロボットです。高校では生物学は未履修、大学の授業は形態学

みずす書房

ジョン・C・ケンドルー
『生命の糸』

やクエン酸サイクルの話であり生物学に興味があったのが湧かなかったのですが、自分の知らない生き物の世界があることが大変な驚きでした。その後、「マルヤマー！何ヨンドルンヤ？」とひやかされながらも、「愛の狩人」ならぬ「ウイルスの狩人」（G・ウイリアムズ著、岩波書店）を読み、いろいろなウイルスに興味をもちました。大学紛争を経て、3年生の夏にはアポロ宇宙船が月面着陸、4年生の時には大阪万博があり、やたらと活気ある時代で、これからサイエンスやテクノロジ―が飛躍的に発展しそうな希望がもてました。折しも分子生物学・分子遺伝学の全盛期だったので、4年生の卒業研究では生物化学教室への配属を希望し、先のことは考えずにその世界

に飛び込んでいきました。実はこの本とは別にバイオの世界に駆り立てられた決定的な動機、いわゆる青雲の志があるのですが、結局、私の場合はイージーな方向に流れてしまいました。他の本は捨てましたが、この本だけ残しておいたのはそれなりの愛着があったからでしょう。本書はタンパク質分子の構造研究のバイオニアであるケンドルーが市民向けに分子生物学を解説したものです。写真が多いので読み易いですが、今では古書でしか入手できませんし、バイオテクノロジーの時代に内容的にはちよつと古めかしいように思います。代わりに「二重らせん」(J・D・ワトソン著、講談社)を推薦します。こちらは入手可能。DNAの二重らせん構造発見の物語

ですが、研究者も奇人変人ではなく普通の人だと知り、親しみがもてました。人生にはたくさん分岐点があり、誰にも人生の転機につながるような本があるように思います。いい本に出会えるといいですね。私の授業「分子でつくるナノマシン」は学生時代に見たウイルスの姿を核として想像力をふくらませた産物です。RPGも面白いですが、現実の世の中にはバーチャル世界よりもっと凄じびつくりするようなことがあります。事実は小説より奇なりです。現実から目をそらさないで下さい。「本を読め、空を見ろ、飯を食え」とは誰かの父親の言葉です。たくさん本を読み、たくましい体と未来を見る目をもった「知恵あるヒト」になって下さい。

ジョン・C・ケンドルー(一九一七—一九九七) 英国の生化学者。一九六二年、X線結晶解析を用いてタンパク

質の構造を解明する研明し、ノーベル化学賞を受賞。『生命の糸—分子生物学への招待』は、一九六八年の出版。

グレゴリー・E・ペンス

『医療倫理―よりよい決定のための事例分析1・2』

(宮坂道夫・長岡成夫訳)

谷口泰弘〔医学部〕

この書籍を紹介することになった経緯は、本学の教養ブックレットのアンケートに回答したことに始まります。私に与えられた題目は、「人生を決めた書物について」ということですが、そんな大袈裟おおげさなことは書けません。しかし、学生さんに読書の楽しさを知ってもらいたいという思いを込めて、「心に残った書物について」という視点から実際に読んでみてどう思い、どう感じたのか？何故その本を挙げたのか？ということを少しばかり述べたいと思います。

ご紹介する「医療倫理―よりよい決定のための事例分析1・2」は英語で出版された本の第3版の日本語訳です。私は前版を90年代に初めて読みました。現在、私は



みずず書房

5775円(税込)

医学部で生命倫理学を担当する教員のひとりとして在籍していますが、実は出身学部は社会科学系の学部・大学院です。医師ではありません。しかし、昔から医療、特に医療制度および医療経済に興味を持つ一学生でした。この本との出会いは、先生から「これ面白いよ」と薦められたのがきっかけでした。通読してみても、「生物医学研究および臨床医療に係る様々な倫理的問題を含んだジレンマには医療関係者、患者・家族、保険者、地域社会、国家などの異なる立場があつて種々の価値観が交錯するのだな。一般社会人として「医療」を理解するためにはその状況を丁寧に整理・把握する必要があるのだな。」という理解を得ました。皆さんはもう既に知識としてお

持ちだと思いますが、生命倫理学は倫理学と違って学際的な性格を有しています。簡単に述べると、生物医学に関係する諸問題を倫理的・法的・社会的な視点から考えるまだまだ新しい学問です。本書との出会いが、私のような背景を持つ者でも、医療を考え、社会制度としての医療の末端に関わることができるのではないかと気づかせ、生命倫理に触れるきっかけとなりました。肝心な本書の内容ですが、主にアメリカで起きた医療倫理が論じられる事例を詳細に分析している点に興味をひかれます。安楽死・尊厳死の問題、人工妊娠中絶を含む生殖補助医療の問題、脳死臓器移植の問題、エイズや精神病の問題など幅広く論じており、従来からの哲学・倫理学によるアプローチばかりではなく、社会的合意に向けた公

共政策的な側面からも見事に記述しています。示唆に富んだ本であると思います。

学生さんたちに、ひとつ考えて欲しいことは、指定された本だから仕方なく買って読む、自分の専攻学問（当然、専門領域の本を読むことは必須ですが！）だから読む、と読書に凝り固まったイメージを持ってしまっていないか自問して欲しいということです。現代社会は読書に頼らずとも情報を入手するための手段が多数存在し、困ることはないかもしれません。しかし、せっかく大学という学びの場に集い貴重な時間を過ごすわけですから、友人をつくるのと同じように先入観を持たず、たくさん書物に触れてみてご自分の記憶に残る一冊に出会っていただけたらと願っています。

グレゴリー・E・ペンス 一九七〇年、ヴァージニア州ウィリアムズバーグのウィリアム・アンド・メアリ・カレッジを卒業。一九七四年、ニューヨーク大学で博士号取得。

一九七六年からアラバマ大学医学部および哲学科の哲学教授。他の著書に、『遺伝子組換え食品―その不安と誤解』（青土社）などがある。

奥村康

『免疫のはなし』

本橋 力〔医学部〕

学生時代から読書好きで様々な本を読んでいたが、今回紹介する「免疫のはなし」に出会うまで、「人生を変えた書物」などに出会うことはなかった。雑誌の特集などで紹介された「生き方を変えた一冊」などを乱読したりもしていたが、それによって人生を変えようなどとはつゆとも思わず、ひたすら読んでいただけであった。しかし、「免疫のはなし」は本当に何気なく手に取って読んでみただけで、結果的に人生を決める一冊となってしまう。人生を変えるような本というものは、自分から目をざらざらさせて探しても全く出会わないもので、ふと出会うものなのだということをまざまざと感じた。

奥村康
免疫のはなし

東京図書

2100
円（税込）

その当時私は、企業の研究所で医療機器の開発を行っていた。この機器には血液が直接流れ込むため、血栓が生じて機器を詰まらせてしまうことと、装置内に取り付けてあるフィルターに血液が通る際、白血球が活性化してしまうという問題があった。これを解決するために、様々な血液関係や免疫関係の専門書にあたってみたのだが、専門用語と独特な表現のオンパレード（その当時はほとんど日本語には思えなかった）で、ほとんど理解できなく、あえなく撃沈^{げきせん}。結局、件の問題は専門家への相談という形で何とか解決した。

しかし、当時の私にはエネルギーが満ちあふれていたためか、「理解できない自分が許せない」と、引き続き

専門用語のオンパレードに徒手空拳、挑み続けていた。そんな消化不良のある日、ふと立ち寄った書店の、しかも一般書の棚に、今回紹介する「免疫のはなし」を見つけた。最初は「まあ通勤の慰みなぐさに読んでやろう」と、軽く読み始めたのだが、読めば読むほどどんどん引き込まれていった。内容は、免疫学の黎明期れいめいから最先端の学説までをとっても平易に解説したもの。しかし、これだけならば普通の入門本と変わらないのだが、この本が他と違うのは、どんな難しい項目に関しても、面白いとえ話に置き換え、とにかく免疫学を解つてもらおうとする著者の態度であった。この本を読むことによって、専門用語と独特な表現のオンパレードが「あれは、そういう意味だったのか」と感心すること限りなく、この本によって精神的に救われたような気がした。しかもこの本はそれだけにとどまらず、免疫学の面白さを私に教えてくれ、

さらに、「こんなに面白いものならば自分も研究してみたい」というところまで私を免疫学に魅惑させてしまった。この本のおかげ？で再び大学の門を叩く決心をし、研究者としての現在の私があることを思うと、非常に感慨深い。この稿を書くにあたり、ふたたび読み返してみたら、T細胞を子供にみたて、その成熟過程を小学校入学から大学卒業にたとえて説明するなどわかりやすい内容にいまだに感心させられる。

その後、研究者として、免疫学を皮切りに様々な分野を経て、発生物学へと現在は違う分野に身を置いてはいるが、このような面白い専門書？を書けるような研究者になりたいという思いは今も私の中に続いている。

まさに、この一冊がなかったら、私の研究者人生はなかったであろう。

中谷宇吉郎『雪』

山本典史「人獣感染防御研究センター」

『雪』（岩波文庫）は「雪は天から送られた手紙である」という詩的な言葉を残した雪博士・中谷宇吉郎が自らの研究について語った名著である。名言の由来となる一節は、『雪』の最後の最後に現れる。「このように見れば雪の結晶は、天から送られた手紙であるということが出来る。そしてその中の文句は結晶の形および模様という暗号で書かれているのである。その暗号を読みとく仕事が即ち人工雪の研究であるということも出来るのである。」中谷は北大理学部に赴任した頃、雪の結晶の多様な形を目にし「自然の工の持つ雰囲気」に感動したことをきっかけに雪の研究を始める。雪の結晶は6次の対称性を持つ美しい六華の形が今でも有名だが、これ以外に



岩波文庫

525円（税込）

も複雑な形態を持つことは既に知られていた。しかし、多様な結晶が生成する詳しいメカニズムについては全く分かっていなかった。当時の中谷の専門は原子物理学であり、雪に関する知識は乏しかったはずである。「実のところ本物の雪を顕微鏡で覗いて見たのはこの時が初めてなのである」という無謀とも思える状況から着手したにも関わらず、如何にも造作ないという風に一歩一歩進んで行き、5年後には世界に先駆けて人工的に雪を作ることに成功してしまう。「実験室の中で何時でもこのような結晶が自由に出来たら、雪の成因の研究などという問題をはなれても随分楽しいものである」と考えていた。始終そういう気持ちを持ちながら、天然の雪とそれ

に直接の関係がある霜とを見ていたら、何時の間にかすらすらと雪の人工製作への道が開けて来たのである。」
中谷は人工雪を詳しく調査した結果、結晶の形と外界の気象条件（気温と過飽和度）の関係を明らかにする。雪の結晶に刻まれた暗号を読み解く鍵となるこの関係は、現在、ナカヤ・ダイアグラムとして世界的に知られている。中谷の研究によって、雪は美しいばかりでなく、上層の気象の状態など、大気の構造に関する様々な情報を包蔵していたことが明らかにしたのである。

私は研究者になることを目指していた学生時代、研究室で実験を始める同級生を横目に、大学の図書館に籠って将来必要と思われる知識を詰め込む毎日を送っていた。新しい研究を始めるには予め十分な知識が必要であり、知識を得るための訓練が不可欠であると頑に信じて一通り「訓練」が終わり、意気込んで研究に取り組み始めたとき、一歩も前に進めなくなっている自分に気付いた。

中谷宇吉郎（一九〇〇—一九六二） 寺田寅彦の弟子。

師と同様、物理学者で随筆家。一九三〇年代に雪の結晶の研究を始め、人工雪の製作に成功する。他の著書に、『科

とりあえず実験データは得られるが、複雑なデータを読み解き、その中から法則性を導き出すことが出来ない。自己実現の周到な計画の何が間違っていたのか、全く見当がつかなかった。急速に自信を失っていた頃、出会った本の一つが『雪』である。中谷の研究では、物理的直感が随所に活躍する。直感的な思いつきを億劫がらずに

実践することで、現象の本態に潜む問題の所在が明確にされ、解決の道筋が徐々に照らし出されていく。まるで推理小説のように。中谷の師・寺田寅彦は「嗅ぎ付ける力がなくては本当の研究は出来ない」という心得を残している。研究は、既知の知識を集積すれば済むものではなく、目の前の現象に対して純粹な興味を持ち、直感的な推理を働かせることが必要である。結局当たり前のことだが、自分で考えることが足りなかったのだ。このことを自覚させ、研究の本当の楽しさを教えられた『雪』は、私の人生を決めた一冊である。

学の方法』（岩波新書）、『中谷宇吉郎随筆集』（岩波文庫）などがある。

板倉聖宣

『ピタゴラスから電子計算機まで』

室 政和（工学部）

この本が初めて出版されたのは昭和38（一九六四）年である。その年に東京オリンピックが開かれ、東海道新幹線が開通、名神高速道路も一部供用を開始している。電話も車も一般化しておらず、ケータイなどはなかった。現在では電子製品は、車も電話もケータイもアイポッドもテレビもDVDも、たいていコンピュータである。だが、当時、コンピュータが社会のあらゆる場面に浸透したIT社会の到来を予測した人は一人もいなかったと思う。

この本のタイトルで時代を感じさせるのは「電子計算機」という言葉である。当時は「コンピュータ」という言葉は使われていなかった。当時の「電子計算機」は非常に高価な機械でごく一部の研究所や企業でしか使われていなかった。名前でしか知らない「電子計算機」になにか新しい時代の息吹を感じ取っていた中学生の

板倉聖宣

ピタゴラスから
電子計算機まで

国土社

1733
円（税込）

私が住んでいたのは岐阜市から車で1時間あまりもかかる田舎だった。父は、大垣市にある化学メーカーに勤めていたエンジニアであったが、中学生になっていた私を岐阜市内の大きな書店に連れて行ってきて、そこで好きな本を買っていい、と言ってくれた。その中で選んだのがこの本である。

この本のなかにギリシャ時代の三大作図問題の解説があった。すなわち「角の3等分問題」：与えられた角の3分の1の角度を作図せよ、「立方体倍積問題」：与えられた立方体の体積を2倍した立方体を作図せよ、「円積問題」：円の面積に等しい正方形を作図せよ、という問題である。これらを「定規とコンパス」だけを使って作図するのである。

これらの問題は長い間多数の人が挑戦してきたがついに解けなかった、そして現在ではそれが「できない」

ということがわかっている、という説明が印象深く記述されていた。角の3等分などは角度を測りそれを3で割ればすむ事だ、角度は分度器で測れる、割り算のやりかたは小学校で習った、と考える人はこの問題の意味を正しく理解していない。ここで言っているのは近似的な測定・計算ではなく、理論的に正確な作図法なのである。

もっとも「できないことがわかっているってどういうこと？」という質問に正確に答えることはやさしいことではない。「どのように定規とコンパスを使っても作図できない」ことを示すにはどうしたらいいのか。

自分がやってみて「どうしてもできなかった」としてもそれに意味はない。別の誰かが良い方法を思いつく可能性があるからである。中学生になって、いろんなことをうまく計算することで答えを出す楽しみを知り始めた私は、この「できないことを示すことができる」ということに意外な面白さを感じた。とはいってもそのことの正確な意味がわかったのはもつとあとのことである。

高校に在学中、どちらかといえば味気ない受験勉強の中、父が連れて行ってくれた大きな書店に帰宅途中に寄ることが楽しみのひとつになった。そこは私にとっ

ては教科書や参考書とはちがった数学の本を見ることでできた唯一の場所だった。それから数学に関わる書物の特に関心を持って読むようになり、大学でも数学を専攻するようになった。その最初の動機は案外この「ピタゴラスから電子計算機まで」だったかも知れない。現在でも、コンピュータのセキュリティを確保する暗号理論の基礎になっているのが「計算困難性」である。

「計算困難性」とは「最速のコンピュータでも何兆年というような非常に長い時間をかけないとできない」という意味である。公開鍵暗号の基礎になっている「素因数分解計算」や「離散対数問題」の計算困難性は長い数学研究の過程から経験的に認識されてきたことであり、現在でも数学的に証明されているわけではない。ここにも「できないこと（計算困難性）を示す」ことの難しさが顔を出している。問題の難しさはギリシャ時代もIT時代の今も変わりはない。

この本を買ってくれた父は昨年（二〇〇七年）12月に亡くなった。父は化学メーカーでの仕事に忙しい中、私たち姉弟3人を分け隔てなく可愛がってくれた。父は私たちに多くのものを遺してくれたが、この本は父が私に遺してくれたものの中で紛れもなくもつとも大切なもののひとつである。

ジュリア・ライ、ダヴィッド・サヴォルド編著
『まだ科学が解けない疑問』（福井伸子訳）

晶文社

2520円（税込）

甲畑俊郎〔医学部〕



カリフォルニア大学の図書館で、私はある一冊の文庫

本を手にしていました。大学生の諸君が未だ幼い頃にさ

かのぼります。題名は「Awakenings めざめ」といい、

作者はオリバー・サククスでした。その頃、私はパーキ

ンソン病の原因の仕事をはじめ、その原因に関するあら

ゆる文献・書物を検索していました。そして、図書館の

片隅にある「めざめ」という本に遭遇しました。ページ

数が少なく、二、三日かけて読み続けました。勤務する

ニューヨークの病院での彼の担当する患者に関しての作

品でした。嗜眠性脳炎後のパーキンソン病患者数十人の

症例の状態が記載された本でした。その詳細を知るには

未熟でした（私の母国語は日本語で、今でも、私の英語

力は変わりません）。

帰国後、たまたま立ち寄った書店で「まだ科学が解け

ない疑問」の題名の単行本が目にとまりました。目次を

みると、精神、生物、健康：が記載され、健康のところ

に「殺し屋の十年「脳の伝染病」との項目がありました。

本を開けると、嗜眠性脳炎について記述されて、「嗜眠

性脳炎の最初の記述はウィーンで、時は、一九一六年か

ら一九一七年へかけての冬のあいだ、そして、それは世

界的規模で流行し、ヨーロッパからアメリカじゅうにひ

ろがり、500万人の人たちに打撃を与え、一九二七年

にとつぜんに謎を秘めて消滅した」。読み進めていくと、

「世界的流行の犠牲者のうち数人が今日でも生きています。

彼らは病気には打ち勝ったが、それはゾンビのような状態であった。神経学者オリバー・サックスは、ニューヨーク郊外の病院ではじめてこれらの生存者を診察した……。それからの記述は以前読んだ「[Awakenings]」を思い起させました。最初に英文で読んだせいかもしれません。各患者の状態が生き生き述べられています。奇跡の薬「ドーパ」による劇的な治療効果、そして、悲劇が記載されています（この文庫本は「レナードの朝」というタイトルで映画化され、その単行本も発売されています）。

す）。そして、最後に「またいつの日か、同じことがおこらないといえるだろうか」と結んでいます。

「まだ科学が解けない疑問」の単行本は、私の研究室の本棚にあります。いまだ、パーキンソン病の原因は不明です。私はその原因を追究しています。そして、カリフォルニア大学の図書館の片隅にはオリバー・サックスの書いた「Awakenings」という文庫本がいまでも眠っています。

ジュリア・ライ 一九八〇〜八六年、雑誌『サイエンス』の編集委員。現在、雑誌『サテライト・オービット』の主任編集者。

ダウイッド・サヴォールド 編集者として、アメリカ科学振興協会につとめる。

高橋裕 『地球の水が危ない』

―本との出会い、人との出会い、いろいろな出会いを大切に



岩波新書

735円(税込)

高木朗義 [工学部・社会資本アセットマネジメント技術研究センター]

この本との出会いは、忘れもしない二〇〇三年六月三日、それは留学先のウィーンだった。もちろん、ウィーンの書店に日本語の新書が売っているはずはない。恩師である岐阜大学名誉教授の小柳先生が当地を訪問された折、「そろそろ日本語が恋しいでしょう。」といただいたものである。知人から著書を貰う以外、他人から本を貰ったのは子供の頃以来で、これ以降もない。つまり、大人になって他人から本を買って貰ったのはこれ一冊ということになる。よく考えてみると、とても不思議な出会いだった。

実際、本の内容はとても面白かった。1時間ほどであったという間に読んでしまった。特に、興味深かったのは、「日

本は大量の水を輸入している」という箇所である。アジアやアフリカ地域の水不足は、日本には関係がないと思っている人がほとんどであろう。しかし、現在日本が輸入している農産物を中心に、その生産には合計744億^{m³}/年も水が使われている。したがって、それらを輸入している日本は、間接的に大量の水を輸入していることになる。これを間接水輸入量というが、国内の年間水使用量が合計878億^{m³}/年であるから、その量がどれくらい多いか容易に想像できるだろう。原油高などを背景に再び食糧自給率を高めようという動きが出てきている昨今、その実行には水が足りないのである。私の研究テーマは、安全・安心な社会づくりであるが、新しい研究の視点が

見つかった本との出会いだった。

さて、小柳先生の話の少ししたい。小柳先生は研究室こそ違うが、大学時代の恩師で、教員としての大先輩でもあり、今でも時々お会いする。大変温和で、人を褒めることがとても上手な先生である。小柳先生という人そのものから学ぶことが多く、小柳先生との出会いそのものが私の人生に大きな影響を及ぼしていることは間違いない。

その後、この本のお陰で、優秀な学生とも出会うことができた。この学生は、この本に出会い、防災に関する内容で卒業論文を書きたいと私の研究室に入ってきた。芯の強い学生で、この学生のお陰で新しい研究テーマにも挑戦できた。本との出会いが人との出会いに繋がり、最後には新しい研究テーマに繋がったのである。

実を言うと、私は子供の頃、読書が嫌いだった。課題

図書でさえ1冊全部を読めず、短編集の一編だけ読んだり、前書きとあとがきだけを読んだりしていい加減な読書感想文を書いたこともあった。それが今では、年間50冊くらい読んでいるだろう。決して多いとは思わないが、自分自身にとつては驚くべき変化である。しかし、ある意味では変わっていない。なぜかと言うと、相変わらず小説はまったく読まず、読むのはノンフィクションばかりだからである。つまり、子供の頃は自分の興味にあった本に出会っていなかっただけである。遅まきながら、今ではたくさん面白い本に出会い、様々な糧になっ

ている。本にせよ、人にせよ、出会いというものは、自分の人生にとつてとても大切だと思う。最後まで読んでくださった皆さんにも、いろいろな出会いを大切にして欲しいと願っておわりにしたい。

高橋裕（一九二七〜） 静岡生まれ。東京大学第二工学部土木工学科卒業。現在、国際連合大学上席学術顧問。

他の著書に、『国土の変貌と水害』、『都市と水』（ともに岩波新書）などがある。

人生を決めた書物

2008年10月20日 発行

編集 岐阜大学教養教育推進センター 広報FD専門委員会
(野村幸弘責任編集)

発行 岐阜大学教養教育推進センター

〒501-1193 岐阜市柳戸1-1
TEL. 058-293-3007

印刷 株式会社コムラ

岐阜大学 教養教育推進センター